

巡  
礼  
記

# 目

# 次

序章	04
一 遍路宿にて	12
二 二人の会話	32
三 詩集より	50
四 手帳その一	84
五 桜の樹の下で	90
六 手帳その二	104
七 淡島神社	110
八 同行二人	130
終章	148

# 序章

「こんにちは、一期一会です」

ドアを押し、マスターと目が合うと同時に、私は彼に先手をとられまいと明るく声をかける。カウンター越しに、グラスを拭く手を休めて、マスターはどんな反応を示すだろう。なじみ客ではあってもほとんど口をきいたことのない人間から言葉を投げられて、うれしく感じるか、それともとまどいの表情を浮かべるか、「苺一枝」と誤解して頭の中が？マークで満たされるか……いや、あのカレンダーを置いたくらいだから、マスターも密かに期待していたのかもしれない。私と向き合う。十秒、二十秒、三十秒——真空の時間、素の対面。不安、怖れ、期待とともに、次に何が起こるか分からない。私の手や足はどう動くのだろう、動こうとしているのか——私は集注する、張りつめる、力が凝縮され、未知への飛翔……。

その日私は、担当者と打ち合わせをするために行きつけの喫茶店で待ち合わせをしていた。自宅兼仕事場では手狭なので、駅にも近く雰囲気の良い——いつ行っても静かなギター音楽をBGMに流している、全席禁煙で、混み合っているのでもなければかといって閑古鳥が啼いているのでもない——この喫茶店を、よく利用するのだった。無論、マスターのいれてくれるコーヒータ、奥さんの手作りどらまの「今日のケーキ」のおいしさが決め手になったの言うまでもない。

いつものようにドアを開け、マスターと目が合い——その瞬間に、私の心地よさは保証されている。この小さな店で唯一窓のある席に私は着き、まず出窓の飾り棚に生けられた花を確認し、通りを行く人々に目をやり、席に着いてから三十秒後に——このタイムミッドが私には好ましい。二十秒ではまだ落ち着かないし、四十秒では忘れられたのではないかという不安が頭をもたげてくる——マスターが近寄ってきて私の前でメニューを広げ、私  
が何を注文するのかわかりきつているのに、儀式として私は一呼吸間を置き、指をとめる。

「おっ」

マスターの簡潔な受け答えに頷き返した私は、書類を入れたブリーフケースを膝の上に載せようとして初めて、テーブルの隅、壁際に、小さな卓上カレンダーが置いてあるのに気がついた。墨字で印刷された「今月の言葉」を、私は読んだ。

毎日が

一期一会

人間なもの

膝のカバンに手を置いたまま、私はためいきをついた。目は窓の外の光景に向けられた

まま、私は物思いにふけた。毎日、ということは、朝起きて家族と顔を合わせ、食事をし、通勤電車に揺られて出勤し、職場の同僚と挨拶を交わす——そのルーティーンの一つが、一期一会というのだろうか……。

打ち合わせが終わり、ショートケーキを食べながら雑談をしている時に、私は編集者にナゾをかけてみた。

「二期一会の反対語、ですか？」

若い彼女は、卓上カレンダーに気づいてない様子だった。

「人生、倦怠期、ときめかない、昨日今日明日、思い出、水たまり、いつか見た陽——人、出会いのなさ、かな」

詩的なイメージから始まって、私たちは思い込み、固定観念、偏見、石頭へと移り、最後に先入観で落ち着いた。

「先入観か……同じような言葉で、先入主があるよね」

私は自分の思いつきが気に入った。そうだ、我々が主人公なのに主役の座を奪われて、主のごとく振る舞われてしまうのだ……。

確かに私たちは同意する。へ人生という名前のゲーム場に、同伴で入場することを。それが唯一の許可条件なのだから。私たちは、広い円テーブルの——奈辺が見えない、広

大な——決められた席に案内される。すでにゲームは始まっている。白いテーブルの上を、黒い札カードが行き交っている。無数の手が伸びて札を取り、捨て、また切り直す。私は興奮し、ゲームに加わろうと椅子に腰かけようとして——何と、おもむろに外套を脱いでいた彼が、もう我がもの顔に座っているのだ。私は落胆するが、始まりはこんなものかと妙に納得して、彼の背後から円卓をのぞきこむ。ゲームは続く。延々と続く。札カード、玉たま、牌ばいと素材は変わっても、無数の人間が参加した人生ゲームは果てしなく続く。私は退屈してくる。ゲームそのものに飽きたのではなく、見ているだけなのに疲れたのだ。左右の席に目をやると——灰色の霧もやがかかったようで、茫漠としている——私のように飽きた少年たちが、しゃがみこんだまま壁にもたれてうたた寝をしている。私はゲームに参加したくてたまらない。押さえきれずに立ち上がると、彼は察知したのか

「本当にプレイしたいのかね。それなら、一度、やってごらん」

背中であえて、のっそりと席を空ける。黒光りする椅子は——何十年も腰かけていたのだ——彼の存在そのものだ。手口は分かっている。私は自分に言い聞かせる。落ち着いて、落ち着いて、ヤツの逆を行ってやろう……。

「そうやっていろいろ憶測するのは、わしの仕事じゃなかったかね」

耳元で彼の押し殺した声を聞いて、私は我に返る。手は空白——カードが下に落ちてい

た。いつもの喫茶店の戸口で、私は立ちつくしている。ドアのノブに手をかけたまま、押すこともできずに・・・。

私はうなだれて立ち上がり、彼に席を譲る。なぐさめるように私の肩に手を置いてから、彼は何事もなかったような顔でゲームを再開する。私は間違っていた。私が彼に付き添ってきたと思っていたのに、彼——先入主——が、私をエスコートしてきてくれたのだ。彼なしでは、私はこのゲーム場の場所すらも、分からなかっただろう・・・。

私は納得した。私にできること——残された可能性は、彼が一服しに外の空気を吸いに行つた束の間、代役として席を温めるだけなのを・・・。

そう、旅があるのではないか。日常生活を離れて未知の世界に旅立てば、彼とは別れられなくても——そんなことはありえない——私が前に出る、少なくとも人前に立つことぐらいはできるだろう。時間がたてば、彼と私の立ち位置が元通りになるとしても・・・。

編集者が先に帰つたテーブルで、私は二杯目のコーヒー——いつものキリマンジャロではなくアメリカン——を飲みながら、窓の向こうを見やっていた。人が行き交う——皆、後生大事と先入主をおんぶして・・・。その中に、一人だけ、リュックを背負つた青年が現れた。私に緊張した面もちの横顔を見せ——背中の荷物には「一期一会」の貼り紙がガムテープでとめてある——彼は急ぎ足で駅の方角に消えて行つた。

私はブリーフケースから創作用のノートを取り出すと、余白に一行書きとめた。

「弥生三月、桜のつぼみがほころび始めた頃、一人の男がリュックを背負って四国へ旅立った」



一 遍路宿にて

四国八十八箇所を歩いて回る、いわゆる歩き遍路は、一説によると年間三千人は下らないだろうと言われている。近年のお遍路ブームでその数は増加傾向にあるようだが、正確な数は不明である。誰も統計のとりようがないからである。

まず、歩き方に二通りある。一番札所から順に回って八十八番で結願けちがえを迎える「順打ち」と、逆に八十八番から回る「逆打ち」である。順打ちの場合、徳島（阿波）は発心の地、高知（土佐）は修行、愛媛（伊予）は菩提、香川（讃岐）は涅槃の場とされている。初めての人間は順打ちを選ぶ場合がほとんどであるが、二度三度と回数を重ねると、逆に歩いてみたいという欲も生まれてくる（こういう“通”の間では、逆打ちの方が御利益ごりやくが大きいとされる）。更に——これは団体のバスツアーにも言えることだが——仕事などの関係で何回かに分けて回る人間もいる。また、四国遍路を単にウォーキングの1コースととらえて歩くタイプも、最近は目についてきたという。実際に何人が歩いているのか、それぞれお釈迦様にでも聞いてみないと分からないだろうが、今この時も、どこかの山道を、あるいは海岸まちなかべりを、街中の歩道を、誰かが歩いている、歩き続けているのだけは確かだろう。では人は何故、歩くのだろうか？理由は千差万別であろうが、私はその動機・目的・要因から、大まかに三つに分類されるのではないかと考えている。

第一は御利益重視型である。これが、四国遍路メインストリームの主流派であろう。この場合の御利益と

は、俗世間的なものもあれば、純粹に宗教的な感情も含まれる。例えば、家族の健康や幸福、自分の病気快癒や栄達、良縁、自己実現などの諸願成就を求めて歩くのである。信仰に基づく遍路をここに分類するのは失礼かもしれないが——現職の真言宗の僧侶や高野山大学の学生も歩いていると聞く——何らかの“成果”を期待する点では、同じではないかと考えている。

このタイプの人達は、願が叶うのは自らの勤行の果実だととらえているから、熱心にお参りする。寺での読経——本堂や大師堂の前で般若心経や真言マントラを唱える——は一心不乱に行い、お札は必ず納め、納経帳に朱印を押してもらうことを忘れず、弘法大師が定めたとされる遍路道からされることも決してない。しばしば酒断ち茶断ちと称して、巡礼中にお酒やお茶を一滴も飲まないという彼らなりの苦行を課すこともある。

第二は物見遊山型である。四国遍路にあやかっつて、飲めや歌えである。この人達は巡礼は形だけのものであるから心は温泉につかり、うまいものを食べることに主眼がある。なるほど四国には山もあれば、海や川もある。逗留場所にはこと欠かない。そのため自ずと僻地にある寺や難所の札所——といっても車で数分も行けば集落に出られるような場所やたかだか数百メートルの山の上に過ぎないが——には足が向かない。納経帳よりも記念写真やお土産が大切になる。このタイプの増加は、四国遍路がマスメディアによって表層的

にとりあげられるにしたがって避けられない現象となっている。

第三は課題追究型である。これは前二者と較べて圧倒的に少数であろう。特徴としては、二、三十代の若者と定年前後の熟年が多いことがあげられる。女性の一人旅も、ほとんどこの部類に属する。本人が意識するしないにかかわらず、何らかの人生のヒントを求めている点が共通している。自分探しの旅とも言える。では第一類型との相違はどこにあるかと言えば、英語の *life* という単語を比較のために持ち出すのが分かりやすいかもしれない。ご存知のように、*life* には「生活」と「人生（あるいは生命）」という二つの意味があり、ある場合には分けて、ある場合にはニュアンスを重ねて用いられている。いうまでもなく、生活派は第一であり、私が街で見かけた彼——名前を吉岡拓真（よしおかたくま）という——は、第三のタイプにあてはまる。

ここまで書いてきて、一から三のいずれにも分類されない極々少数の歩き遍路がいることに思いが至った。いわば「流民遍路」である。この人達は、社会的経済的な事情から歩いている（つまり、お遍路しながら食べている）らしい。昔は業を負った人たちが社会から疎外されて四国へと逃れてきたようだが、今もその伝統が根付いているのは驚きである。四国の人々の篤い信仰心に、養われているのである。

さて、初めて遍路に出ようとした場合、まず一番札所の靈山寺門前でグッズを買い揃え

——ここには白衣びやくえ、菅笠すげがさ、金剛杖こんごうじょうはもとより経本や数珠・鈴たぐいの類、さらにはガイドブックや防犯用具に至るまでの必需品が並べられている——午前と午後の二回、本堂で住職がとりおこなう授戒じゆかいの式に出て巡拝にあたっての心構えを誓うのが順当であろう（蛇足であるが、この時に参拝者が大学ノートに記す氏名や住所などの情報が、歩き遍路の人数推測の論拠となっている）。

三々五々、釈迦如来が祀られた本堂に集まった十数人の輪の中に、吉岡拓真もいた。お互い初対面なので会話が生まれることもなく、皆押し黙ったうちに儀式は始まり、住職の訓話でつつがなく終わった。彼は第三の型に属しているので形式には無頓着で、普段着にリュック一つという出で立ち、持ち物は着替えや洗面具、折り畳み傘といった一般的な旅行用具の他に、国土地理院発行の地図や文庫本の般若心経、それに寝袋が詰めこんであった。授戒式の後、見よう見まねで一通りの参拝を済ませ——彼には功德を積むという観念（というか関心）がなかったのでお札を納めもしなければ納経所にも行かなかったが——山門を出たところで吉岡は振り返った。彼の頬は、少年のように紅潮していた。同行どうぎょうの歩き遍路たちは、すでに水に放たれた魚のように散っている。吉岡もリュックを背負い直すと、二、三步あるき出してから思い直したように立ち止まり、荷物を下ろして中からデジタルカメラを取りだした。彼は山を背後に寺の全景を収めようとして何度もカメラを構えた後、

シャツターを切った。記念すべき、四国遍路の第一枚となった。参道に並ぶ土産物屋のおばさんたちの好奇の目に照れ笑いを返して、吉岡はぎこちなく歩き始めた。

\*

「吉岡さん、こつち、こつち」

お食事はあちらですと女将おかみに案内された広間に入ってみると、すでに何人かが座敷用の長机に向かつて食事をとっていた。その中央に、浴衣姿であぐらをかき、みそ汁を飲み込んでいる田中のとつちあんの姿があった。吉岡は箸で手招きしている田中の斜め向かいに腰を下ろした。

「体を動かした後のメシは、何でもうまいですな」

「ええ、そうですね」

とつちあんは、ご飯をかきこみながら話しかけてくる。それにしても何という早業だろう。先刻、吉岡が風呂から上がった時には、まだ流し場で白衣に石けんをこすりつけてゴシゴシやっていたのだ。それがもうあらかた食事を終えようとしている。わたしら戦後の焼け跡闇市世代の人間でしょ、早飯ばかりは直しようがないですよ。ぐずぐずしてたら兄

弟にも先をこされちまう。カップラーメンといいとこ勝負ですわ——こう話していた田中の言葉は、あながち誇張ではなかった。吉岡は湯飲みにつがれたお茶を一口飲んでから、箸に手をつけた。

目の前に並んだ料理はどれもありきたりのものばかりだったが、五時に寺の門が閉められ追われるように山を下りてきた歩き遍路たちをいやな顔も見せずに迎えてくれた女将の、心意気が感じられる品々だった。吉岡は一口一口、味わうように食べ始めた。

「それにしても青山さん、難儀しましたなあ」

田中のとつつあんが、二席横に離れて座っていた眼鏡の若い男に声をかけた。青山と呼ばれた男が箸を持ったまま吉岡の方を見たので、吉岡も軽く会釈した。

「必ずしも、そうとばかりは言えないんじゃないですか。これはこれで良かったのかな、と思えて」

青山が抑揚のない声でもったいぶったように答えると、とつつあんは事情を知らない吉岡に解説してみせた。

「実はね、××番札所の手前に橋が架かってたでしょ。あそこで道を間違えちゃったんだとさ。我々は吉岡さんが気づいてくれたから事なきをえたものの、あのまま左に進んでたらエライ目に遭ってましたな。今日中に宿まで着いてたかどうか、分かったもんじゃあ

りませんよ」

吉岡が田中のとつつあんと出会ったのは、まさにその場所だった。橋のたもとに立っていた遍路道保存会の道標が逆を指していたのである。支柱にマジックで「間違えるな。正しいのは右」と書かれているのに吉岡は気がつき、前をよたよたと歩いてきた初老の男を呼び止めた。二人は並んで引き返し、男は田中と名乗って、道々、身の上話を始めた……

「道に迷って良かったというのは、またなぜでしょう。僕には理解できないんですが」

吉岡が話の輪に加わろうと言葉をはさむと、青山は眼鏡を鼻の上で押し上げるしぐさをしながら答えた。

「二時間、正確に言うると二時間十二分ロスしたのは事実ですが、損失に見合うだけの教訓は得たんじゃないかと。これからも歩いて行くうえで。一つは道標を鵜呑みにしない、という事ですね。たとえ保存会が立てたものであっても。特に、分かれ道では、必ず立ち止まって地図と照合する作業を怠らないようにしないと。二つ目は、やはり気持ちに余裕を持って、という事かな。当初の予定では、二十キロ先まで行けるはずだったんです。僕の場合、時間が限られてますから。それが急ぎ過ぎて、逆に墓穴を掘ってしまった。サインの見落としは、自分の焦りから——青山は軽く舌打ちをした——「やはり、急がば回れ、ということでしょう」

「うんにゃ、わたしなんか―」

とつつあんが、待ってましたとばかりに身を乗り出し青山の言葉を引き取った。

「今度のお寺は山の上、山の上っていう意識が頭にあつたもんだから、この足で登れるかどうかだけが気がかりだね。道標なんかろくすっぽ見てもませんでしたわ。川の流れとは逆に奥へ奥へと入っていくのに、何の疑問も持ちませんでしたよ。吉岡さんが声をかけてくれたからよかったものの―田中が顔を向けたので、吉岡も反射的にうなずいた―「あのまま一人で登ってたらと思うと、ぞっとしますわ。それにしても保存会の人は、罪作りなことをしてくれますなあ。お詫びに手みやげの一つでも持ってきてもらわんと、気持ちがおさまらんですよ。ねえ、青山さん」

「お詫びの品、ですか―青山が苦笑した―「遍路道保存会は、多分、NPOかなにかのボランティア団体だったんじゃないかな。そこまで責任というか保証を求めるのは、酷ひどくじゃないですかね」

「水を差すようですが―」

先程から黙っていた吉岡が、遠慮がちに言った。

「誰かのイタズラという線は、考えられませんか」

二人のやりとりを聞いていて浮かんだ疑問を、吉岡は口にしてみた。

「ガイドブックには、熱心に活動していかも歴史のある団体という紹介のされ方をしましたから、180度逆方向の標識をとりつけるといっものは、常識的には考えにくいんじゃないでしょうか」

「うーん、いたずらか。あり得ますよね」

青山がもう食べることに興味をなくした様子で、箸を置いた。

「っていうと、何ですか、吉岡さんは——」

田中のとつつあんが気色ばんだ。

「歩き遍路は、我々三人だけじゃない、何人いるか知らんが、百人、千人、歩いとる。それをたまたまどこぞの性根の曲がったやろうが悪ふざけをして、たまたまそれが保存会の耳に届かずにいて、たまたま今日、この青山君がまんまとひっかかった、と——こう、お考えですか」

「ええ、あくまでも、一つの推測ですが」

「わたしは、納得いきませんな。ケアレスミスじゃなくて単なるいたずらだとしたら、なおさら腑に落ちん」

何度も首を横に振る田中を尻目に、両膝を立てて体育座りをしていた青山が茶化すように言った。

「カモにされた身でこんなことを言うのも、本来は恥ずかしいことなんでしょうが」——青山は膝の上で顎をカクンとさせた——「これも、ありかな、と。仕事では、いくらでもあるじゃないですか。出し抜いて、出し抜かれて、っていうのは。そういう世界から、束の間、離れたくて四国まで来たんですがね」

食事をしているのは、いつの間にか三人だけになっていた。配膳口の向こうで、女将は話のやりとりが聞こえているのかいないのか、背を向けて洗いものにいそしんでいる。一瞬訪れた沈黙の気配を追い払うように、田中のとつつあんが野太い声を挙げた。

「ものは考えよう、ですよ。うん」——田中は吉岡と青山の顔をみくらべた——「これをた例えば、いたずらにはいたずらでも、お大師様のいたずらと捉える。まあ偉いお方だから、いたずらとは言わんでしようが。とにかく、ポジティブシンキング、ですな。きのうもテレビでやってましたよ。風水師が、運気を変えるのは、自分の心次第だと。心のもちよう一つで、上昇運にも下降運にも流れを変えられるそうじゃないですか。観ましたか？」

二人とも首を横に振るのを見てから、田中は続けた。

「あの道標のおかげで、青山君は道に迷い、人生の貴重な教訓を得た。わたしはわたしで、吉岡さんと出会い、難所を越えられた。吉岡さんは吉岡さんで——正直なところ、わたしにもよく分かりませんが、何か得るものがあつたはずですよ」

\*

どの社会や共同体にも、不文律というか暗黙の掟があるものである。決して成文化された訳ではないのに、それぞれの会員にとつて「自律的な」承認と振る舞いが求められる。四国遍路も——この場合は歩き遍路に限ってであるが——一つの共同性の場であるから、不文律が存在する。具体的に言うと、遍路同士が初対面の時にはお互いに名を名乗り、自らを語る&相手の話を聞くという掟である。いわば能舞台の口上のようなものだが、ビジネスシーンにおける名刺交換にあたると思えばよいだろう。

そんなことはどのガイドブックにも載ってないし、全ての歩き遍路がその作法どおりに振る舞う訳でもない。しかし四国に足を踏み入れた人間は、初めて自分と同じ境遇の人間と遭遇した瞬間から——誰に教えられるでもなく、意識することすらなく、そうしている自分に気づくのである。それが、文化や伝統というものかもしれない。

吉岡拓真の場合もそうであった。吉岡が橋のたもとで田中に出会った時——靈山寺を発つて数日後のことであるが——彼は「道を間違えてませんか」と声をかけてすぐにまた自分の世界に戻るつもりだった。が、四国自然歩道として整備された木道を登り始めてしばらくして振り返ると、倒れた御影石の標柱の上に座った老人が、膝の上に金剛杖を置き、

あてどない視線をさまよわせていたのだ。彼は一瞬、カメラを思い浮かべたが、すぐに拭い去った。老人ホームの父の姿と、重ね合わせていたのだ。吉岡は山道を下って手を貸そうとしたが田中はかたくなに拒み、仕方なく並んで歩き始めた。

「普段車に乗ってばかりいるから、足がいうことをきかなくてね。ボケは、足からくるんでしょ。帰ったら、さっそくウォーキングでも始めないと」

田中がボヤきながら休み休み歩を運ぶので、いつしか二人の間に距離が生まれ——吉岡が階段の踊り場のような所で待つことが幾度となく繰り返された。その過程で、彼はかの掟を知ることになる。

さて、話を遍路宿の場面に戻すと——年長の田中に促されて青山と吉岡がまず自己紹介をした。二十代半ばの青山は東京の設計事務所に勤めており、次のライフステージへのステップアップに向けて、いわば助走期間として四国遍路を選んだという。この夏に一級建築士の国家試験を受けることにしており、仕事と受験勉強の合間を縫って数日間の休みをとりながら何回かに分け四国を一周するプランを立てていた。一方、吉岡は難関私学の受験塾に勤めていたが心身のバランスを崩し、今は休職して自宅療養をしていた。自分を見つめ直すための“転地療法”を兼ねて、四国までお遍路に来ていた。二人の話をお茶をおかわりしながら聞いていた田中のとつつあんは、出番を待ちかねていたように最後に真打

ちとして登場した。

「お二人ともまだお若いのに、たいしたもんだ。自分というのを、持ってらっしゃる。青山さんは、こう、着実に人生の階段を昇つてるといふ感じを受けますし、吉岡さんは立派に所帯を持つて——お子さんは？まだ。ナニ、慌てることはない。これからですよ——今はしばし、休憩中というところですか。一歩前進二歩後退、いやいや一歩後退二歩前進。んっん。わたしなんぞ、自慢じゃありませんが、若い頃から二十回も転職してますわ。今は薬品卸の仕事してますが、一つところに我慢できない性質たちでして。自分には、他にもっと向いてる仕事があるんじゃないかと思うと、いてもたっても居られなくなるんですよ。あとさき省みずに、突き進んでしまふ。今から思えば、それも若さの特権でしょうかなあ。そうは言つても、四十までだね。男も不惑を過ぎると——女は三十五歳——まず地力ぢりきが落ちてくる。体にガタがはじめて、気持ちの方も余裕がなくなつてくる。「このままじゃあ終われんぞ」という焦りにも似たものがある一方で、あきらめも生まれてきてね。人生の、難所ですな。

行きつけの飲み屋のママからは、『田でんさん、いつまでも遊んでばかりいないで、いいかげん身を固めなさいよ。年老いてからの男の独り暮らしほど、寂しいものはないっていうし。いい人、いないわけじゃないんですよ。だったら。男のロマンもいいけど、女には女

の事情っていうものがあるの。若いうちに産んどいた方が、後がとってもラクなんだから』って、脅されちゃってね。これがまた、立派な女なんだよ。水商売しながら、女手ひとつで二人の子どもを国立大学までやって。まあ、そんなこんなで、オレもそろそろ年貢の収め時か、と付き合ってた彼女と所帯を持ったのが、四十も半ば。

結婚は、わたしには正解でした。筏に、スクリューと碇が同時についたようなもんで。女房は、自分で言うのもなんですが、よくできた女でね。何しろ、毎日脳みそをぬか漬けみたいにグジャグジャかきまぜながら生きてるような人間でしょ、わたしは。そこを、上手く操ってくれました。何やかや言っても、やっぱり家族の力だよね、最終的には。女房の支えと、生まれてきた子どものためにがんばらにやあいかなという思いで、何とかやってこれましたわ。『お父さん、あとは定年までひと踏ん張りしてくださいな』『がんばり、マス』。一人息子が、まだ大学生なんですよー何しろ仕込みが遅かったもんでー都内の大学に通ってます。こいつが卒業して社会人になるまでは、オレも好きな酒をひかえて寄り道もせず、と思ってた矢先に、我が家にとつて一騒動持ち上がりましてね。何だと思えます?」

田中はなめるように二人を見た。吉岡にとつては二度目に聞く話だったが、青山は立て膝の同じ姿勢のまま熱心に耳を傾けていた。

「リストラですよ。世間じゃあ、よくある話です。でも、よもや自分の身に降りかかる

うとは、夢にも思いませんでしたよ。そりゃあ会社の業績が悪化したのは分かっていたが、だからといってわたしが犠牲になるいわれはない。自慢じゃありませんが、営業部主任として、それも中途入社の手先のある身で、会社に人一倍貢献してるといふ自負はありましたからね。ほんとのところ、営業成績では誰にも負けてませんでしたし、上司も、わたしの力は高く買ってくれてたんですよ。うん。

人事部長から役員室に呼ばれて、最初は世間話から入って雰囲気ですな、何かへんだなどは感じてたんですが——肩をたたかれた瞬間、頭がもう真っ白になっちゃってね。何でオレが、という思いが渦巻くわ、息子の顔も浮かんでくるわで。とっさに出たのが「辞めません。何と言われようと、わたしは定年まで勤めさせてもらいますっ」。

わたしは必死でしたよ。家にはまだすねかじりの息子がいて、下宿生活してるもんで、毎月二十万仕送りしてるんです——ちったあホラも吹いてね——建て売りで買った家のローンも残ってるし、月五十万円もらわないとやってけません。部長、この歳で会社からおっぼり出されたら、わたしにどんな仕事が残ってるって言うんです？ガードマンのおっちゃんか、ビルの清掃員ぐらいなもんでしょう。二十万がせいぜいじゃないですか。それでどうやって家族三人養ってやって言うんです。冗談じゃねえや。首くくんなきやいけねえよ。

すみません。言い過ぎました。わたしにも至らない点が多々あると思います。部長、遠

慮なく仰って下さい。わたしも、死ぬ気でがんばりますから。え？もう一度考えてくれて言われたって・・・わたしにも家庭がありますからね、何度お会いしても結論は変わりませんよ。部長、お願いですから、一度社長に会わせてくれませんか。社長なら、わたしの訴えに耳を傾けてくれるにちがいない。分かって、ほしいなあ。何しろ、従業員の家族三人の命がかかっているんですからね、会う義務がある。

わたしは必死でしたよ。はつたりと浪花節の限りを尽くして、一世一代の名演技ですわ。普段の営業でもね、これくらいできたら言うことないんですが。ハッハッハ。

一週間、粘りに粘って、よそよそしい職場の雰囲気にもメゲず——あれって、ヘンですよねえ。いつの間にか、ッきのこ、みたいに生えてんだから——実を言うと、毎晩、睡眠薬をかじって寝てたんですよ・・・。忘れもしない七日目、人事部長から呼ばれてよろよろと塹壕から出ていたら、戦況が一変してたんです。向こうから、泣きを入れてきたんですよ。「君の要求額は保証するから、何とか子会社に転籍してくれないかね」って。やった、勝った！小躍りしたい気持ち在必死に押さえてたら、顔が自然にほころんでくるのが分かってね。「部長、行きますとも。行かせてください。喜んで、後進に道を譲ります。向こうでは、わたしも今以上にがんばりますから」

会社に迷惑をかけず、双方のメンツも立ち、結果的にわたしの首もつながった。まあ、

落とし所に落ち着いたといえ、それまでなんですけどね。

今度の旅は、自分へのご褒美ですわ。よくやってきたなあ、おまえって。女房も、分かってくれてね。気持ちよく送り出してくれました。四月から心機一転、新しい職場でバリバリ働き始める前の骨休め。仮定かりていですわ。運転免許であるでしょ。仮免が。あれの、定年退職版ですよ。ハッハハ。さ〜あ、明日からまた、歩いて、いい空気すって、うまいもん食って、英気を養うぞ〜」

パピペップ、ブルルツ、ブルルツ  
パピペップ、ブルルツ、ブルルツ

田中のとつつあんが両腕を広げた深呼吸のポーズを止めて、ん？という顔をした。青山が脇に置いてあった携帯電話をとりあげると、「お袋です」——画面を見ながら無表情に言って切り、元に戻した。

「父親ってというのは、闘う存在なんですわね」

「ん、まあ、たいした役目でもないけどね」

田中のとつつあんがまんざらでもないという表情で吉岡をみたので、吉岡は思わず目を伏せた。

「ところで、さ、つと、どっこいしょ。今晚は、青山君の最後の晚餐じゃあないですか。

これも何かのご縁。お近づきのしるしに、一杯、どうですか。わたしも、久しぶりにしゃべって、気持ちがいいなあ」

田中は、タイミングをはかったように配膳口から顔をのぞかせた女将に向かって指を立ててみせた。

「お銚子一本、お猪口ちよこは三つ。地酒があれば、いうことなし。遅くまですみませんねえ。あ、後、何かつまむものも。お願い」

女将の笑顔が消え、ふと訪れた幕間まくあいに、吉岡が腕時計を突き出すように見ながら腰を浮かせた。

「田中さん、今日はこれで失礼させてもらいます。明日は朝六時には立とうと思っんです。早起きして歩かないと、日が暮れるまでに宿に着けないような気がして——」

「次の札所までは、だいぶ距離がありましたよね。確か、60キロはあったんじゃないかな」青山が横から口をはさむのを尻目に、田中のとつつあんが悲しそうな声をあげた。

「そりゃあ、わたしにはムリだ。お釈迦様が逆立ちしたって、できない相談だ」  
とつつあんはそこまで言うのと、いきなり居すまいを正して畳に両手をついた。

「吉岡さん、ありがとう。あんたのおかげで、難所を越えられて、わたしも何とかやってゆく自信がつかまりましたよ。ほんとうに、ありがとう」

目にうつすらと涙を浮かべて、田中のとつあんは頭を下げた。虚をつかれたように吉岡は腰を落とし、田中のふるえる肩に手を置いた。

「田中さん、やめて下さい。僕は何もそんなつもりで――」

吉岡がそこまで言いかけた時

「こんばんは。遅くなつてすみません」

弾むような声がして、若い女が部屋の戸口に現れた。女は、奥の女将に向かって謝る仕種をしてから

「お邪魔します」

顔を上げた三人の男たちの視線を受け流すように部屋に入り、ただ一つ残っていた膳についた。宴は氣勢をそがれ、吉岡は「お休みなさい」と言い残して一人部屋に引き揚げた。

二  
二  
二人の会話

「ただいま」

「お帰りなさい。いま開けるわ」

「遅かったわね。どうしたの？」

「少し遠出してきた。足が、棒のようだよ」

「今、お茶を入れるわね」

「今日は、どこまで行ってきたの？」

「いつもより足をのばして、大堰おおぜきの先まで行ってみたんだ」

「あそこまでは、だいぶあるでしょ。お疲れさま。お風呂わいてるわよ。それとも、ご飯、

先にする？」

「そうだね。今晚のおかずは？」

「野菜のポトフと、メバルがおいしそうだったから、煮付けにしてあるわ。メバルは春魚はるうおっていって、春が旬なのよね。いつもお魚を買って、商店街の魚治うおじのおじさんが、教えてくれたの」

「ふーん」

「はい、お茶どうぞ」

「ありがとう」

「大堰のコンクリートが切れた土手のとこでね、摘み草をしてる人たちを見かけたよ」

「あら、もうそんな季節なのね。今年は春の訪れが早いのかしら。そういえば、きのうスーパーの野菜売り場にも、うどが並んでたわ。山菜のうど。この頃は、うども畑で栽培してるんですってね。何を摘んでたの？」

「つくしとよもぎ、それに名前の知らない、ニラに似た草」

「のびるかな、かんぞうかしら。のびるもかんぞうも、おひたしにするとおいしいのよ。野草は天ぷらにもよくするけど、どうかしらねえ。味が同じになっちゃう気がして。のびるは、ぬたでもいけるわ。あおやぎと酢みそで和えて。今度、作りましようか？」

「そうだね」

「お休みの日に、一緒に行けたらいいわね。野草を摘みに」

「うん・・・」

「次の公休は―来週の水曜日。Aシフトか」

「土手の草の中で、仰向けになつてボンヤリ空をながめてたら、急に、昔のことが思い出だされてきて・・・時間がたつのを忘れちゃったんだ」

「小学校時代に、いーばんちゃんていう、おもしろい子がいてね」

「それって、ニックネーム？」

「そう、いーばんちゃん・・・。名字が飯田だったか飯山だったか忘れちゃったけど、下の名前が番太郎っていつて、そこからついたあだ名。ひょうきんな子でね。顔がなすびのような形をしてて、肌が透けるように白いんだ。目玉をくるくるまわしながら、おちよぼ口を手で隠してボソボソつとしゃべる。何を言われても『そうだよなあ』って腕組みして考え込むのが、いつものポーズ。おつむが少し弱かったからみんなに馬鹿にされてたけど、逆に可愛いがられてもいたんだ。六年の時に転入してきて、一緒にいたのは二学期間だけだけど、転校してつた時は、クラスにぽっかり穴が開いたようだったよ。あいつ、今ごろ、どこでどうしてんだらう・・・」

「・・・」

「ある時、いーばんちゃんがおもらししちゃったことがあつてね」

「いたいた、あたしたちのクラスにも。おもらしさん。何を隠そう、わたしも帰り道に一度だけ、おもらししたことがあるの」

「授業中に、どこからともなくふーんとおしっこの匂いが漂ってきて、くすくす笑いが起きた。『先生、飯田君がおもらししてます』って誰かが言ったもんだから、教室中がどつと笑いに包まれてね。僕も振り向いたら、いーばんちゃんがなす顔を真っ赤にして目をむいてるんだ。でもその後、担任の女先生が保健室に着替えに連れてつてる間、いーばんちゃ

んを一番にいじめてた悪ガキの男の子が、雑巾で椅子をふいてやったんだよ」

「ほほえましいわね。目に浮かぶようだね」

「はたから見れば、ほほえましいかもしれないけれど、果たして当人はどうだったか」

「そうねえ。居心地が悪かったのは、確かなようね。すぐに転校しちゃったんでしょ。お茶、お代わりは？」

「いや、結構。僕たちは——僕は、実は同級生をいたぶって喜んでただけなんじゃないだろうか。だから長い間、なつかしい思い出として胸にしまっておけたんだらうって、今日、思えてきた。決して反抗しないのが分かってたからね。従順なペットのように」

「子どもって、そんなもんじゃなにかしら。とても残酷なところが、あるわよね」

「そうかもしれないし、そうでないかもしれない。僕には、よく分からない。僕が言いたいのは、彼がもし反抗してたら——実際に何ができたかどうかは別に——彼の思い出は小学校時代の懐かしいエピソードなんかじゃなくて、もっと苦々しいものになってただろうということ。知恵遅れの子を、イジメてたんだからね。そんな自分に、果たして誇りが持てただらうか？」

×男の時も——いきなりツバをかけられて思わずカッとなって手が出てしまったのは、なぜだらうって、僕は今も考え続けてるんだ。特になついていた子なのに、裏切られたっ

ていう思いからか、でも「愛のムチ」なんて決して言えた義理ではないし。僕がシヨツクだったのは、子どもの行為そのものよりも、自分自身の反応。教師ならば、言葉で諭すべきものを、激しい憤りに、突き動かされてたんだ。自分でも制御できない程の。その怒りが、どこから来るのか、何が原因で生まれたのか、それをつきとめない限り、また同じことをしでかすようで、怖いんだ。こわくて、教室には、立てない」

「拓ちゃんが体罰をふるったのは事実だし、そのこと自体は決して誉められたものじゃないわ。幸い、口の端が切れただけで大事に至らなくて良かったもの。でも、その子は先生に対して、越えてはいけない一線を越えちゃったと思うの。たとえおふざけにしても、大人につばを吐くなんて。許されないわ。家庭的に問題がある子なんですよ。一人親で、母子家庭の。拓ちゃんに、お父さんを求めてたんじゃないかしら。ワザとわるいことをして、叱ってほしかったりなんかして」

「そういう面も、あるかもしれないね。ただ、僕は塾の講師でしかないから、彼に責任を負える立場じゃない。勉強を教えることのほかには、何もできない。それ以上も、それ以下も。それより、僕は自分自身の問題が……。体の中から獣が飛び出してきたよう、心の奥底に、何が潜んでいるのか、不安なんだ」

「人間、誰しも、同じような悩みを抱えて生きてるのよ。親との関係に、つまづいたり

して……。あのツバを吐いた子だって、母親に問題があったのかもしれない。もしかしたら、育て方にね。そんなこみいった糸は、少しずつ解ほどいていくしかないんじゃないかしら。試験とは違うんだもの、解答に時間をかけた方がいいでしょ。今は、白紙の答案しか出せなくても」

「そうだろうか」

「そうよ、絶対。焦りは禁物。人生、長いんだし、あたしも、ついてるから」

「そうだね」

「そろそろ、ご飯にしませんか」

「悪いけど、先にお風呂に入らせてもらおうかな」

「どうぞ。ゆ〜つくり、入ってきてね。観たいテレビが始まるの、もうすぐ」

「そうそう、忘れてた。拓ちゃん宛に、〇〇の叔母さんから郵パックが届いてるわよ。

机の上に置いといたわ」

「香典返しじゃないかな。この前のお葬式の」

\*

——立春が過ぎ、四十九日も近づいたというのに、いつまでも悲嘆にくれていては故人も心やすかろうはずがありません。ともすれば萎えそうになる気持ちを奮い起こし、毎日少しずつ日課として、遺品の整理にとりかかったところでございます。そうは申しませんが、アルバムを開ければ思い出の数々がよみがえり、手紙の束をひもとしては主人の文面に思いをさせ、何もせずに一日を過ごしてしまふこともしばしばですが。

そのような折り、押入の段ボール箱から、学生時代の卒業論文や仕事関係のファイルと一緒に、詩集が出てまいりました。『四国順礼』という題名の布貼りの本、背には主人の名前が記されてあります。奥付を見ると、199×年出版と書かれていました。私たちが結婚した年でございます。

私事で恐縮ですが、その年の春、主人と私はある方の仲立ちで初めてお会いし（お見合いのようなものでした）、その後何の音沙汰もないので、この話はなくなつたものと思つていました。すると、春も終わろうとする頃になつて、「結婚を前提にお付き合いさせてくれませんか」という葉書が「四国の消印」で舞い込んできたのです。

今から思えば、私と会つたあと彼は四国をお遍路して廻り、帰つてから秋に挙式するまでの間に、この本を自費出版したのでしょう。生前には一度も、詩集のことは話してくれませんでした（若い時に四国を旅したとは、聞いた覚えがございます）。主人は大学は社

会学部の出で、役所も市民課という地味な職場でしたから、文学といえど話題になつてゐる小説を図書館で借りてきて読むぐらいでした。あの人が詩を書いていようなどは、夢にも思いませんでした。

亡くなった人の書いたものを死後に初めて読むのは、悲しいものです。私には与り知らぬところで、あの人は悩み、迷い、苦しんでいたのだろうか？人生に結婚という節目をつけるために、「何か」を裁ち切ろうとして、四国をお遍路して歩いたのだろうか？・・・心の中に湧き上がってくる問いは、今となつてはもう、誰も答えるものがいまありません。

何部印刷したのか知りませんが、箱の底に詩集は五冊、残されていました。知人のアドヴァイスもいただき、形見分けに子ども達に一冊ずつ与え、わたくしの手許に一冊置いておき、お寺さんにも一冊お供えしてきました。そして残つた一冊を、甥の貴方に受けとつていただけないか、というのが私の切なる願いでございます。勝手に送りつけてしまつて、ごめんなさい。拓真さん、今年不惑をお迎えになるんですね。亡くなった主人もその歳で、お遍路に出かけたのでした――

\*

「ただいま。陽子です」

「お帰り。今開けるから」

「ごめんなさい。遅くなっちゃって。帰り際に、後輩の女の子から相談を受けて、喫茶店で話し込んだりしたの。すぐ支度にとりかかるといって」

「急がなくて、いいよ。そんなにお腹はすいてないから。ご飯は炊いたし、みそ汁も、煮干しでだしはとってあるから、後は具だけ」

「助かる、助かる」

「今日はマーボ茄子にしようと思うんだけど、いい？」

「うん」

「何か、手伝おうか」

「そうね―食器を並べてもらおうかしら。サラダ買ってきたから、お皿に盛ってね。海鮮サラダが、30%OFFになったの。フレスコの総菜売り場で」

「あそこは、悪くないよね。スーパの出来合いのものにしては」

「さう、何から始めようかな。茄子を切って、お味噌汁のワカメをお湯でもどして―」  
「レトルトの素、買っというてよかったわ。この前の安売りの時に」

「どこの製品？」

「味の素。味の素の、マーボ豆腐の素」

「味の素より丸美屋の方が、僕はおいしいと思うんだけど」

「こんど買ってくるわね。ふりかけと一緒に」

「ふりかけは、永谷園だね」

「はいはい」

「その子、どうなった？」

「その後？手を振って別れたわ。明日からまたがんばります、って。わたしに話したらスッキリした顔になって。春は多いのよね、この手の相談が。二年目の浮気って、わたしたちは呼んでるの」

「今日、学院に行ってきたんだ。旅行の相談に」

「どうでした？」

「理事長が会ってくれてね、事務室で。事務長さんも同席して。僕が『自分を見つめ直す旅に出たいんです』って説明したら、黙って聞いていて、最後に『よろしい。療養休暇の扱いにしましょう』って言うてくれたよ。給料はもちろんナシだけど、講師としての身分は保障される」

「よかったわね」

「ただし、条件が一つあるんだ。カメラを持ってって、一日一枚、何でもいいから写真を撮ってくることに。それが――」

「証拠？」

「証明にもなるけど、理事長のネライは、本人曰く『四国遍路は一期一会の旅とも言われてるそうですね。かけがえのない出会いが待ってるかもしれないよ。そこで、一日一枚で結構ですから、心に残った風景なり人物をカメラに収めてきてくれませんか。短いコメントも何かに記入して。戻ってから現像に出せば、吉岡君の『心のありよう』が一冊のアルバムとして形になって残りますよね。我々の仕事において、記録するというのはとても大事な作業で、フィードバックの前段階に位置づけられています。指導技術の改良・改善、並びに学ぶ側の学習心の向上は、フィードバックが十分に機能してこそ期待できます。分かりますか？一月半歩く中で、吉岡君が何を考え、どんな点に気づいたのか、ひとつ我々にも共有シェアさせて下さい。後で、写真と一緒にレポートを提出してもらいましょう。私も、楽しみに待ってますよ。気をつけて、行ってらっしゃい』だとき。話を聞いてたら、何だか首輪に巻きつけた鎖を引きずってる犬みたいで、気持ちはよくなかったんだけどね」

「ううん、いいのよ。学校の、卒業記念アルバム、ぐらいに考えとけば。わたしも、見たいわ。旅行写真。ほんとうなら、ついて行きたいとこなんだもの。さ、できたわよ」

「ご飯、よそおうか」

「あつつう!!」

「どうしたの」

「内蓋がまだ熱かった」

「気をつけてね」

「帰り際に理事長から、『私も教師時代、ノイローゼになって休職したことがあるんですよ。誰もが、一度は通らねばならぬ関門ですな』って、変な励まされ方をされたよ」

「理事長さんが良き理解者で、よかったわね。恵まれた職場環境だと思うわ。今時、職員が不祥事をしでかしたら、即クビでしょ」

「まあね」

「あ、そうだ。冷蔵庫にあさりの佃煮があったんじゃない。お土産でいただいた」

「いま出すよ」

「冷めないうちに食べましょ」

「いただきますあ〜す」「いただきます」

「海鮮サラダ、具は何？ホタテにエビ、イカ？」

「〜みたいだね」

「ケータイを持つてくの？さっきの話の続きだけど」

「携帯電話は、置いてこうと思うんだ。一台二役だから、あつたらあつたで便利だけど、  
“転地療法”という趣旨からしたら、日常生活と切れたところに身を置いた方がいいんじゃないかと思えてね」

「賛成。でも、これだけは約束してちょうだい。宿に着いたら、毎晩電話すること」

「はい」

「寂しさ半分、嬉しさ半分、っていうとこかな」

「え!？」

「カメラ、覚えてる？誕生日のプレゼントに、拓ちゃんからもらったものよ」

「そうだったね」

「忘れてんだから、もう」

「ごめん」

「いいのよ。謝らなくても」

「それにしても、不思議ねえ。ふふふ」

「何が？」

「一週間前には、拓ちゃんが四国をお遍路するなんて、考えられなかったもの」

「・・・」

「二冊の本が届いて、旅が始まる。書いたのは、亡くなった叔父さん。ほとんど、面識がないんですよ。わたしなんか、二度だけよ。お会いしたの。わたしたちの結婚式と、この前のお葬式の時」

「僕も、同じようなもんさ。子どもの頃から、ほとんど行き来がなかったんだ。おじさんの家とは。オヤジとは三十近くも歳が離れてて、しかもお母さんが違ってたからね。別の家族も同然だったんだよ。お袋が死んでからは、なおさら——」

「叔母さんは、どんな人？」

「とても感覚的な女性に僕には思える。ほとんど言葉をかわしたことはないんだけど。思い込みが強いっていうのかなあ。お通夜の席で、いきなり耳元で『拓真さん、お疲れの様子ね。お仕事の方はどう、うまくいってる？、おいくつになられたの？お子さんは、まだ？』って、畳みかけるように聞いてくるんだから。人目もはばからず。喪主としての立場を、わきまえて欲しいよ」

「ふーん、その後に詩集でしょ。叔母さんも、女の勘が働いたのかしら」

「直感で世の中ものが運んだら、こんなラクなことはないだろうさ」

「そんなことないわよ。世のあつれきが、少しは減るんじゃないかしら。ところで、朝

の残り、食べた？」

「昼に食べた。食べてから、出かけたんだ」

「ならいいわ」

「帰りに、オヤジのところに寄ってきたよ」

「お義父さん、どうでした？」

「相変わらず。折り紙おりながら、黙って聞いてた。五月のゴールデンウィークに、近所の幼稚園の子どもたちを招いて交流会があるんだ。その発表準備を、今からしてるんですよって、職員の人が言ってた」

「それまでに、戻れる？」

「さあ、どうだろう」

「一緒に行けたらいいわね」

「アルツハイマーだからな」

「ひとつ、頼みがあるんだけど」

「な〜に？」

「雑誌の『丸』が発売されたら、オヤジに届けてくれないかな。楽しみにしてるんでね」

「お安いご用。他には、何か？」

「今のところ、ないと思う」

「いつ出発するの？」

「春分の日に歩き始めよう、と思ってる。暑さ寒さも彼岸までって言うし、自分のリセットボタンを押すのにふさわしい日のような気がして」

「3月21日。サン、ニイ、イチ。なるほどね。暦を見たら―どっかゝん。ナント、大安吉日。結婚式の集中日よ（笑）」

「あ、この手帳も持ってって。販促でもらったのにしては、オシヤレでしょ」



三 吉岡修二詩集『四国順礼』

(木暮書房 199×年刊)より

## 八 女体山

愛は

あなたの心の中に  
在るの

いえ

それは

あなたの“胸”

あなたの手を

前に出して

そう

あなたの指がさしているところを  
どこまでも

どこまでも

どこまでも

歩き続けるの

そうしたら

あなたの背後うしろから

愛の手が

あなたの心に

やさしく触れるわ・・・

乳色の霧に

包まれている

私は霧雨あめの中

砂礫質みちの山道みちを

踏んで行く

彼女はこの後<sup>あと</sup>

どこへ消滅<sup>い</sup>ってしまったのだろう

四国順礼を

終えた後<sup>あと</sup>・・・

霧の中から

紅い山ツツジの花が浮き上がる

寂静

滴の音だけが

耳に入る

彼女は霧になったのだ

この霧雨<sup>きり</sup>になって

私を包んでいてくれるのだ

或いは

彼女は山になったのかもしれない  
この女や体ま山まになつて

豊かな乳房から

霧を吹き上げているのだ・・・

雨の日は

森が落ち着いて見えるでしょう

しっとり

潤んで

## 七 道後温泉

六時半

朝一番の

太鼓の合図で

私も

道後温泉の神の湯につかった

夏の海水浴場の

芋の子を洗うような混雑の中で

竜の形をした湯口から

お湯を飲む

近くの公園に

一遍上人が名号を刻んだ

初代の湯釜があるというので

出かけてみた

灰色の作業服を着た

老人が公園のゴミ箱を片付けている

私はその後ろ姿に

引かれるものを感じて

湯釜葉師の場所をきいてみた

老人は箒を置いて

私を案内してくれた

湯釜は

砲台のように

鏡座し

南無阿彌陀佛

の番号も

風化せずに読みとれた

私らでも

観光客にきかれた時に

答えられるようにと思つて――

老人は

胸ポケットから

しわくちゃになつた紙を取り出した

ああ

それは確かに

先程の神の湯の

湯釜に記されていた銘文を

拙い字で書き写したものなのだ

老人は

訥々とした口調で

山部赤人の歌を

読み始めた

私は六字の名号を

見つめ続けた

生き

愛して

澄んだ目を持ちたいわね

老人から教えられた

宝蔵寺へ赴く

本堂に安置された

一遍上人の木像

捨てて

捨てて

捨て果てた

上人は

数珠も持たず

草鞋もはかずに

合掌した手を前に突き出すようにして

虚空を

凝視<sup>みつ</sup>めていた

六 足摺岬から土佐清水へ

私が勤めていた

ハンセン病の療養施設にね

最後の歩き遍路と呼ばれた

女性<sup>が</sup>がいたの――

足摺から土佐清水に向かう

明るい樹林の中で

老女が静かに語る

その女<sup>ひと</sup>は

五歳で親に離縁されて

――昔はライ病は不治<sup>やまい</sup>の病と言われてたでしよ

それからずっと

四国を乞食<sup>こじき</sup>して

回ってきたの

ライ病ということ

暖かくしてくれる家もあれば

蔑む人もいて

彼女は多くを語らなかつたけど・・・

大正七年から

そうやって

同じライの人たちと

歩いてきたんだけど

戦争中に警察から

「おまえたちがそうやってるのはよくない」  
と言うので

施設に入れられたのよ

こっちに來てみて

彼女から聞いていたとおりだったわ  
いつまでも

お母さんの後ろ姿を見送っていた

札所の前の坂

警官に呼び止められた

橋のたもと・・・

そうやって

数知れぬ人たちが

ここで行き倒れになったと思うと

私も

せめて

その人たちの霊を弔うために

歩かなければ、と思つてね・・・

道端の苔むした石に

私は

心の中で

手を合わせた

五 遍路宿にて

人間は物じゃないきに

心じゃき

お金なんかいくらあつても

ナーンにもなりやせん――

お接待を受けた

遍路宿で

朝

出がけに

老婆が私に語った

私の父は

肺ガンで死にましたが

それはそれは

きれいな死に顔で

最期は

ちいとも苦しみませんでした

おまえたちが

信心を持ってくれて

うれしい

言うちくれてな

私の孫も

免許を取って

お札を持たせてやりましたら

夜車を運転してて

崖から落ちて

孫だけ助かりましてな

他の人はみな

即死じゃったのに

私ら

子どもの時から

お遍路さん見えて

今も

毎日この前をお大師さんが歩いてる

思うと

毎月ひとりほ

お遍路さんを接待して

年に二度

人を雇って

近くの遍路道の

草刈りをしとります

お大師さんとの

約束じゃけん

私らには

それくらいしか

できないきに・・・

名もない民の

絶対の信

信は真

アンタも

まだ若いきに

力を落とさんと

歩いてな

千円札を数枚

手に握らされて

私は

旅館やどの玄関を出た

“お四国”は

四国だけじゃないきに

老婆の言葉を

涙で胸に

刻みこんで

## 四 室戸岬

人間の心というのは

とらえがたいものよなあ

ほんとうに

とらえがたい――

海岸の丸石に腰を下ろして

行者が私に語った

タバコの煙をくゆらせながら

わしは二十年間

四国を修行して

回ってきた

始めは加持祈祷もやっておった

頼まれて

キツネつきを追い出したり  
ガンを治してやったりな

だが

人間というのは

苦しんでいる時は

神よ仏よとすがつてくるが

治ってしまえば

冷たいものよ

わしが倒れてしまった時は

誰も

手を差し伸べてくれなんだ

それからは

加持祈祷もやめてしもうた

本当に癒さなければいけないのは  
人の心なのに

わしには

それだけの力がないと

悟わかってな

今は

仏に一步でも近づきたいと

思うとる

母親とも離縁して

托鉢して歩いてな

死ぬまで行ぎょう

死ねば・・・

行き倒れの

無縁仏よなあ

春休みの家族連れが  
波打ち際で戯れている  
春の陽光ひかりが  
波の上で踊っていた

### 三 太龍寺

私は太龍寺へは

二度行つた

一度

寺から下山りた時

誰かに

呼び止められたような気がしたのだ

そのような

歩き方をしてはならない、と

同行と別れて

一人引き返し

本堂から離れた南の舎心で

私は坐を組んだ

太龍とは

夕才

光の流れ

龍の鱗のような

光の波が

滔々と打ち寄せてくる

一日一生

喝！

私はその声を

聞いたように思った

一日が一生ならば

私が踏み下ろす一步一步が  
この一日なのだ・・・

私は時間ときに虜囚とらわれ  
成果かたちに心を奪われて  
過程みちを失っていた・・・

許されて再び

南へ向かった私は

暑い国で生まれたレゲエの歌の一節を口ずさんでいた

死に急ぐこともない

生き急ぐこともない、と

形だけ行ってもね

空くうは色しきを通してしか

現れないけれど

心のない色しきには  
何の意味もないわ  
あなたは  
ほんとうに  
“ありがとう”が  
言える？

→  
→  
•  
•  
•  
•  
•

一 愛を深めよ

愛さなければならぬ

私は

何もかも

愛さなければならぬ

そう書き置きを残して

彼女は

旅立った

四国順礼に

私も

彼女の後を追って

死の国へ――

山里には

梅が咲き

春風に

桜が舞い

川面を

山ツツジが彩った

人々は

山菜を摘み

田に稲なえを植え

浜で網を揚げていた

枇杷には袋がかけられ

鯉は節にされ

裏作の裸麦ムギが

青々と茂っていた

私は

誰にも会わぬ山道を歩きながら

潮騒の音に耳を傾けながら

彼女の言葉を

考えていた

愛されているの

愛されているの

無条件で

何もかも

愛されて在る

と知った時

人には

何ができるのかしら

何が残されてあるのかしら  
・  
・  
・

そう呟いて

彼女は

四国を後にした

“愛さねばならぬ”

から

“愛されて在る”

へ

何が彼女の心を

変えたのだろうか

そして

彼女はその後

どのように

“お四国”を

歩み続けたのだろうか・・・

〈同行二人〉

〈お大師さまに会い

お大師さまと語る〉

遍路道に吊るされた

札に導かれて

私は

“あなた”と語り

彼女と語った

やわらかい落ち葉の上を踏んで

私は

霧雨にぬれる新緑の中を歩いて行く

へおまえは

自分を不完全なものとも

汚れたものともみなしてはいけない

ただおまえの

愛バグテイを深めることだけを

思いなさい

ラーマ・クリシュナ

あなたの言葉を

私は

今日、四国順礼を終える日に

理解できたように思います

遠く

木立の中から

鈴の音ねが・・・

四 手帳その一

太龍寺

何も聞こえず、誰にも出会わなかった

田中のとつつあん：「人間、生きている内が華<sup>はな</sup>、死んだらそれまでよ」(果たしてそうだろうか?)

VS

父…黙して語らず

父の思い出

1. 会社の草野球の試合の応援に狩り出されて、すっぱ抜けたバットが腕に当たり、骨折した。ドジな父
  2. 朝は決まった時刻に家を出、夕方も決まった電車で帰宅していた。定時の人
  3. 晩酌は二合
  4. 父のノート 日記とも言えないような大学ノートに、朝のラジオ英会話の単語を書き写したり、小金を貯めて株式に投資していた銘柄や値動きを数字で羅列していた。
- 中学生の時に盗み見た、パラパラとめくったページに「死にたい」という一行が目飛び込んだ

◎僕は父に殴られたことがありません。怒られたこともありません。母が父の代行役

5. 中三の受験の年、借家を出て父が買った土地に家を建てた。建て前の日。立ち上がったばかりの棟柱の間にござを敷き、コンパネの上に仕出しを並べた。忙しく給仕をする母。大工たちの言祝ぎ唄。酔った頭領が、父にも一曲うたえと強要した。

「大将、ここで一発、かあちゃんにぶちかまさんと、いい家はおつたちませんぜ」

ニヤケた若い大工たちの顔。少年は、柱の陰から息を潜めて見ていた。父は歌った。『同期の桜』

きさまとおれとくは

どおきのさくら

おなじへいがつくこうの

にわにさく

張り裂けるような父の声。生真面目な顔が、ひきつっていた。場違いの歌に、雁首を並べてうなだれる大工たち

★自称「予科練、特攻に往く寸前で終戦を迎えた」

父から戦争の話を聞いたことは、一度もない。これからも、ありえない。多分。今は特養で好々爺を演じている（？）、認知症。紙飛行機作りの名人。折り紙を1/4に切つてピンセットで小さな零戦や一式陸攻を折り、演芸会で五本の指の腹に載せて編隊飛行を演じてみせる。拍手喝采を浴びている時の、うれしそうな表情

■背骨をへし折られた人生 十代の後半（今なら高校生）で、価値観が180度転換する体験をするとは、どのような人生なのか？

親父<sup>オヤジ</sup>、俺はあんたに一度聞きたかった。あんたの人生は、一体、何だったんだ、って。蟻のようにはいずれまわり、蟻のように何もものに踏みつぶされそうになり、また蟻のように黙々と働き続けた一生。あんたは俺に、何を伝えてくれたんだ。何を残してくれたんだよ。

何にも、ない

オレは受けとりそこねた。だからいい年こいて四国なんかをうろつき回ってるんだ、鬱々

と。鬱病。セックスレス。

磯に打ち上げられた海藻のように、海に漂って生きることの不安・・・

○太平洋

波の打ち寄せる岩場で考えた。親父が死んでたかもしれない海。そうしたら、俺は生まれてなかった。生き延びたオヤジに、感謝すべきか？ Yes！ Yes！！ Yes!!!

感謝が足りない。おめえには感謝が足りねえんだよ。見ろよ、田中のとつつあんを。皆、必死こいて生きてるじゃねえか。汗水たらして働いて、子どもにメシ、食わせてるじゃねえか。

○おじさんの「愛されて在る」とは、感謝の気持ちの表現だろうか？ そうでないような気がするが・・・

生きていくというだけで、人は何かを伝えている存在なのかもしれない。関係の網の目。これは恐ろしいことだ。今の僕には、恐ろしすぎる考えだ。

室戸岬

海をみて、二日過ぎす。空海の修行の地。朝陽の差し込む洞穴。ほらあな空と海。自分にはまだまだ足りない。まだ出会えてない気がする。

一週間ぶりに陽子へTEL。写真は撮れているかと聞かれて、風景ばかり撮っている自分に気づく。念のために持ってきたセーターや寝袋を、家に送り返す。

道、半ば

五  
桜の樹の下で

磨り減った花崗岩の階段を上って行くと、ところどころの窪みに硬貨が落ちているのに気がついた。一円玉や五円玉が、砂を撒いたようになっていて、参拝者が功德を積むために、一段ずつ腰をかがめながら置いていった姿を想像しながら、吉岡は、前を行く二人の老婆の背中を見つめていた。

「へえ、難儀なことぞ」

「もう少しだに、がんばりいや」

老女たちは背筋を伸ばし、腰をたたいて、階段の踊り場で一息ついた。吉岡も一段下にすわって休憩した。登ってきたばかりの石段の下、山門の前には大きな榎が枝を伸ばし、道路をはさんで続く集落の向こうに海が見える。左右にのびる岬に抱かれた内海は、波静かな水をたたえ、水平線は春のおだやかな陽光に照らされた海とも空ともつかぬ淡い世界に消えていた。

「そろそろ、行くべえ」

「どつこらしよ」

老婆達は、階段を左右に分ける中央の錆びた手すりに手をかけると、重い体を引き起こした。吉岡もゆっくりと腰をあげ、また二人の後についていった。一段一段、歩を進めていた吉岡の目に、少しずつ山の緑がせり出し、やがて寺の境内が姿を現した。山腹を切り

拓いた敷地は広くはなかったが、正面奥に本堂が控え、右手には大師堂や鐘楼、左手には寺務所や手水舎ちようずやが整然と並んでいた。今しも本堂の前では、観光バスで巡っていると思おもひき一団が、白装束姿でお経を唱えていた。唱和する声と時折振られる鈴の音が、線香の香りと混然となって山肌を落ちていく。手洗い所の手前、すでに花を落とした桜の若木の下にベンチが置かれ、女が一人ですわっていた。傍らにザックをたてかけ、膝の上に広げたシステム手帳のようなものに目を落としている。吉岡は、カメラの構図を頭に描きながら、ゆっくりと近づいて行った。ベンチの周りには散った花びらが踏みしだかれ、女はかわいらしいスニーカーをはいていた。

「こんにちは」

顔を上げた女の目と吉岡の目が合い——二人は一瞬でお互いを歩き遍路と認識した。

「こんにちは」

「前に一度、お会いしませんでしたか」

△△の遍路宿で、遅れて食事をとりにきた女に違いはなかった。

「そうかしら」

女は屈託のない笑顔を見せると、大判の手帳を閉じて立ち上がった。二人は、名刺交換をした。

「吉岡拓真です」

「橘がおると申します」

かおるがバックを取り上げ、両足の間に置き直してつくったスペースに、吉岡は並んで腰を下ろした。二人の前を、納経をすませた巡礼団が、通り過ぎていった。ざわめきが収まるのを待っていたかのように、裏山でうぐいすが鳴き始めた。鳥はいつまで啼くのか、鳴き止まぬのか——話のとっかかりを探っていた吉岡は、うぐいすの声が止んだ一瞬をみはからって、咳き込むように切り出した。

「いつから、歩き始めたんですか？」

「春分の日です」

「偶然ですね。僕も同じ日にスタートを切ったんです。霊山寺の授戒式には、出られませんでしたか？」

「ええ、午前の部に」

「僕は、午後でしたから、お会いするのがこれで三度目になりますね。四捨五入すれば」吉岡は、言った後からトンチンカンなことに思われて、後悔の念にとらわれた。かおるは「おもしろそうな方ね」という顔をした。

「国語の先生でしょう」

「えっ!?! どうして分かったんです」

吉岡が驚きの声を上げると、かおるは「達筆ですね」と言ってリュックをみやった。吉岡は照れ笑いの表情になった。

「春期講習かなにかで、お忙しくないんですか」

「僕はちよつと・・・」

吉岡はそのあと濁そうとして、抑えきれずに言葉が切れ切れに口を出た。

「不始末をしでかしちゃつて、生徒を、殴っちゃつたんです。悪ふざけをして、ツバを吐きかけた子を。自分が、悪いんです。理性で感情をコントロールすべきなのに、それができなくて。教師らしくない。心の余裕がないっていうか、いつも追われてる気がして。きのうきょう、教師になった訳じゃないのに。いつまでも自信が持てないんです、教育技術とかの問題じゃなくて。何だか、得体の知れない獣が、からだの中に潜んでる気がして。それでも、結果的には良かったかもしれないです。自宅謹慎の処分を受けて。自分を見つめ直す、いい機会になれば。だから、その子には悪いけど、時間だけはあるんです」

涙こそ流さなかったが、吉岡は母親に訴えかける子どもよろしく、しゃくりあげるように言った。黙って聞いていたかおるは、静かにたずねた。

「子どもとの関係は、その後、どうなんですか」

吉岡は、うなだれたまま答えた。

「親にも謝って、イチオウ、修復したというか。だけど、前のようには、口を聞いてくれない」

かおるは一度、大きくうなずいただけだった。吉岡は、目頭を二本の指で押さえると、ふうつと目を見開いた。

「すみません。いきなり自分のことをしゃべっちゃって」

いいのよ。というふうに、かおるはやさしく首を横に振った。

「橘さんは、仕事は、楽しいですか？」

先ほどの自己紹介の際に、彼女は老人保健施設で働いていると打ち明けていた。「父も、介護でお世話になってます」と吉岡は応じていた――

「ええ、とつても。吉岡さんの塾と同じで、お年寄りにもいろんな性格や病歴の方がいますから、なかには小学生より手のかかる人もいますよ。そんな人からは、こちらがどんなに尽くしても、感謝の言葉は返ってきません。でもいいんです、それで。自分が必要とされていると思えば、わたしには十分なんです。何かの役に立っていると、感じられるだけで」

かおるは、話題を変えるように付け加えた。

「知ってました？」

吉岡は、反射的に首を横に振っていた。

「三月二十一日は、弘法大師の命日なんですって」

「知りませんでした」

吉岡は平常心に戻っていた。

「僕はただ暦の上で、サン、ニイ、イチと、＼＼のいい日に選んで選んだんです。気候もこれから良くなりますし。そうですね、そんないわれがあつたんですね。これはいいことを教えてもらいました」

「わたしには、この日しかなかったんです」

「お勤めの関係ですか」と吉岡が聞こうとした時、かおるは朝顔の花がしぼむように目を閉じた。吉岡は、その横顔に魅入った。鳥の音が、また聞こえてきた。

「うぐいすって、託卵するんでしょう」

かおるの言葉が、境内の静寂せいじやくに沈んだ。

「たくらん、ですか？」

『拓卵イクコル』 親鳥が他の鳥に卵を託すこと』

で良かっただろうか、と吉岡が頭の中で答案を書いていると、かおるは目を閉じたまま

何度か頷いた。

「間違えました。逆だわ。託卵するのはかつこうの方で、うぐいすはされる方。かつこうはうぐいすの巣に卵を産みつけると、かえったひなは先に生まれてたうぐいすのひなを巣から蹴落として、うぐいすの親から餌を食べさせてもらうんですって。悪い鳥よね」

吉岡がどう答えてよいか困惑していると、橘が目を開けた。

「吉岡さんは、蹴落とされた方？蹴落とした方？」

質問者の意図を理解しかねて、吉岡は答えに窮した。

「それとも、親鳥？」

「僕には子どもはいません」

「結婚は、されてるんでしょ」

「ええ、一応」

覗きこむように見ていたかおるの顔が、こころもち後ろに引いた。

「わたしは、迷い鳥。親に捨てられて、おじいちゃん鳥に育てられたの」

かおるはそう言うのと膝の上に手帳を広げ、裏表紙のポケットから一枚の写真を取り出した。

「クイズ、百問正解。わたしは、何処どこにいるでしょう？」

手渡された写真を一瞥して、吉岡は写っている女の子の姿に目が釘付けになった。三歳ぐらいの浴衣を着た幼女が、祖父（？）に抱かれてこちらを見つめている。膝の上で孫をあやしているおじいさんは満面の笑みを浮かべているのだが、女の子は緊張に目を大きく見開き、金縛りにあつたように体がこわばっている。田舎の農家と思われる広縁。構図の上では二人は写真の左隅に置かれ、中央には家具が何もない部屋が黒々と口を開けている。そして右端には、母親と思われるワンピース姿の女性が、今しも背中を見せて立ち去ろうとしている。撮影者は、シャッターを押すタイミングを逃してしまったのか、それとも意図的にこの瞬間をねらったのか……。吉岡は、登場人物達ライオンの間に、家族の糸ライオンを引こうとした。

「お父さんですか、この写真を撮したのは？」

「父よ、父。お父さんとは、呼べない人」

「!？」

「自分の娘に、手を出すんですもの。許せないわ。いくらお酒に酔つてたからっていつてかおろが卑下したように笑い、吉岡が言葉を飲み込んだのを確かめてから、吉岡の手から写真を受け取った。

「四十九日目と決めてたの、歩き始めるのは。太吉じいちゃんが亡くなつてから」  
手帳のポケットにスナップ写真をしまいながら、かおろが言った。

「そうですね。実は、僕も、最近――」

おじを亡くしたんです、というところを、吉岡は「父」と言ってしまったから、取り繕おうとしない自分に驚きを覚えなかった。

「そう」

かおるの大きな目でみつめられているのを、吉岡は意識した。その時、

「お父さん、待ってくださいな」

階段の方から声がして、二人が同時に顔を向けた。老夫婦と思しき白装束姿の連れが、階段を上りきったところで息を切らせていた。立ち止まった夫の前に妻が後ろから廻つて、乱れた白衣の襟を直し、ほどけていた靴のひもをかがみこんで結び直してやった。その間、夫は入学式に臨む子どものように棒立ちになつて、素直に妻に身を任せていた。

「さあ、できましたよ」

手洗い所に向かつて歩き始めた老夫婦は、拓真とかおるの前を通り過ぎる時に丁寧にお辞儀をした。二人も会釈して返した。

「父の遺した詩集を――」

老夫婦を目で追っていた吉岡は、思い出したようにあわてて足下のザックをかきまわした。

「四国まで、持ってきたんです」

『四国順礼』をとりだして、吉岡はかおるに手渡した。

「僕は今年四十になるんですが、僕と同じ歳の時に、父は四国をお遍路しているんです。一度もそのことは語らなかつたけれど、父がどんな気持ちで歩いていたのか知りたくなつて、ここまで来ました」

かおるは黙つたまま、興味ありげにページをめくつていた。ところどころで立ち止まる視線の先を、吉岡は不安げに見ていた。かおるの指が、止まった。吉岡は両手を腿の上に置いて、肘を棒のように突っ張らせた姿勢をとつた。

「オヤジは、特攻隊の生き残りだったらしいんですよ。あくまでも、本人の言葉によれば、ですが」

「そつ」

あつけないかおるの返答に、吉岡は拍子抜けした。意気込んでしゃべつた自分が、滑稽に思えた。

「ここ、今は違いますよね。小泉さんが謝罪したでしょ。厚生大臣の時に」

橘が詩集を開いたまま指で示してみせた。〈六 足摺岬から土佐清水へ〉の「ハンセン病の療養施設」というくだりだった。身をかがめた吉岡の鼻に、かおるの髪からほのかな香水のかおりがただよってきた。

「わたし、福祉関係の新聞記事は、スクラップにしてとってるんです。仕事で、必要なことも多いから」

何年前かの、テレビニュースの画面を記憶の中から引き出しながら頷くと、吉岡はおおるから本を受け取り、リュックに戻した。何故か不満な気持ちが残った。

鳥は、どこかに飛び去ったのか、鳴き声はとうに止んでいた。言いしれぬ静寂が、二人を分け隔てていた。話の接ぎ穂をうしなった吉岡は、視線を遠くに向けた。本堂の前で、老夫婦が一心にお経を唱えている姿が目に入った。あの二人は、何を祈っているんだろう。家内安全、いつまでも健康で仲むつまじく、それとも子や孫への気づかいだろうか……。陽子の顔が浮かんだ時、おおるが口を開いた。目は、閉じたままだった。

「小さい時の傷って、いつまでも残ってしまうのかしら」

写真の中の幼女に訴えられているようで、吉岡は言葉に詰まった。

「わたしの父は、おばあちゃんに殺されそうになったことがあるの。おじいちゃんが戦死したっていう知らせが入って、おばあちゃんが気がふれて出刃包丁で子どもを追いかけて回したのよ。後で、誤報だって分かったからよかったもの。無理心中でもしようとしたのかしら。その時の記憶が、本人にはすっぽり抜け落ちてて、いつも笑い話で誤魔化す」

おおるが一間、置いた。

「みんな、歯車を狂わされた」

「僕たちは、同じ、間接的な戦争の被害者ですね」

吉岡が絞り出すように言つて、唇をかんだ。が、その声には、喜びのニュアンスがこもつていた。かおるは目を開けて苦笑いした。

「あら、どうして初対面の人に、こんな話しちゃったのかしら。それも大の苦手の、男の人に」

チリン、チリン

金剛状に結わえ付けた小さな鈴を鳴らせて、先ほどの老夫婦が二人の前を目礼しながら通り過ぎた。吉岡は、焦りにも似た気持ちにかられて立ち上がった。

「橘さんは、参拝はもうお済みですか？」

「ええ、済ませました」

「急いで戻りますから、3分だけ待つてもらえませんか。よろしければ、この後、一緒に歩きましょう。いろいろと話したいことがあるんです」

ええ、いいですよ。というふうにかおるはにこやかな顔で、うなずいてみせた。

「それでは」

「急ぎ足で踏み出した吉岡は、一、二、三歩いきかけたところで振り向いた。」

「その前に、ここで一枚、写真を撮らせてもらえませんか。今日の記念に」

吉岡の一言でおおるの顔に陰がはしり、女ははじかれたように立ち上がった。

「ごめんなさい。わたし、札所以外のお寺もまわってるんです。おじいちゃんの菩提寺の、宗派の寺も。急ぎますから」

一陣の風のように、かおるは階段を下りていった。後には、呆然と立ちすくむ吉岡の姿があった。陽光に輝く海が、遠景をなしていた。

六 手帳その二

写真への自註…その一

土佐の国、修行の地 海沿いの国道を歩く 海から吹き付ける激しい風に砂が舞い、目が開けていられない 足元のアスファルトの上を、砂がぞわぞわつ、ぞわぞわつと動く 風に吹き飛ばされないように、体を傾<sup>か</sup>げて足を前に押し出す 車は、まったく言っていないほど通らない

白昼に、セピア色の世界

砂地に並ぶビニールハウスの群れ 高知県は、野菜のハウス栽培が盛んだった？ 黒いビニールの寒冷遮（かんれいしゃ、でよかつたか）の切れ端が、風に舞い上がる 電線に巻きつく寸前で、くるりと体<sup>たい</sup>を変え、ダンスのステップを踏むように飛ばされてゆく↑— シャッター

その二

前方に白い人影 少しずつ距離が縮まる 菅笠に脚絆、白頭巾の歩き遍路↑—カメラ 「名古屋から来た」と自己紹介した四十代半ば（？）の中年女 夫と子どもを家に残して目を細めているので、なおさらキツネに見える 皮肉な視線

「奥さんはどうしてるの？そう、子どもを産むにはタイムリミットの歳トシね。子どもが、欲しいんじゃないの？」

「わたしはね、前世で何をやりのこしたか知りたくて、歩いてんのよ」

因果応報 輪廻転生 言葉が風に千切れ、中村狂女はしゃべり続ける

「猫の死骸があつたでしょ。車に轢ひき殺されて。どう思った？かわいそうーなら引き返して埋めてやりなさいよ。ホームセンターでスコップでも買って。あれは、ただの抜け殻。ゴミと思えばいいのよ。放つときなさい。」

かわいそうと感じたのは、あなたのエゴイズム。自己憐憫に過ぎないじゃない。死んだ猫に自己投影してどうすんの。何も生まれないわよ。

人間は弱いから、すぐ他人から同情を買おうとする。そりゃあわたしも女だから、男にやさしく肩を抱いてもらいたいと思う時もあるわよ。でも、ダメ、そんなの。女を捨てないと、無限地獄から抜け出せない。肉体も燃やせたら、どんなにいいかしれないわ」

ひきつったような笑い　母の面影を見る

「女にはね、女の業つてもものがあるの。自分で孕はらんだ子を、自分で殺すつて、どういふことか分かる？」

水子か、不注意で（事故 or 病気）我が子を死なせたのか？

「親に可愛がられたことがない？何、甘えたこと言つてんのよ。親は子どもに乗り越えられる存在なの。ハードルが低くてよかったじゃない」

「先に行って。遅れちゃうから。あたしからののはなむけの言葉。男なら、本気出しなさいよ」

その三

低い丘を回り込む　別世界　静かな内海に面した集落　回転サインがものうげに動くレトロな床屋　ガラスの引き戸　ソファでスポーツ新聞を広げていた六十年輩の主人　目

が合う

とまどいの表情

「いらつしやい。どうしますか」

「五分刈りにして下さい」

穢けがれをはらいたかった

床に落ちる髪 目を閉じる 鉄と柱時計の音 業カルマ という言葉が頭から離れられない  
失恋した女が髪を切る、気持ちとはこんなものか それで他人になれるなら・・・

「終わりましたよ。どうぞです」

撮とってもらう 中腰でカメラを構えるオヤジの姿  
鏡に映る坊主頭とニヤケた顔 これが自分だ 今のオレだ 椅子に座ったまま、写真を



七  
淡島神社

「はい、チーズ」

小さな港だった。船溜<sup>だ</sup>まりに小舟が何隻か係留され、岸壁を手探りするように波が触れている。港を囲うように道が続き、海に面して集落が肩を寄せ合っている。背後に黒々と迫る山。夕まずめ、一日の労働を終えた安堵感と夕食の準備に入る前の気ぜわしさが不思議に拮抗している風<sup>なま</sup>のような時間帯。空は、夕焼けが近い。どこかで薪風呂を焚いているのか、煙がたゆたつている。そんな集落のメインストリートを、一人の男が何やら物色する様子で歩いていた。髪は、五分刈りから少し伸び、無精ひげを生やしている。吉岡拓真だった。吉岡は、今晚ここで野宿する場所を探していたのだった。

「おじさん、お遍路さん？」

子どもの声で振り向くと、いつの間に後についたか、お揃いの白のヘルメットを被った小学校低学年とおぼしき子ども達が、色とりどりの子ども用自転車を押している。先頭に立ったリーダーと思しき男の子に、吉岡は返答した。

「そうだよ」

「何してるの？」

今度は二番目の女の子が聞いてきた。吉岡は、自然に口許がほころんだ。

「おじさん、今晚、ここで泊まれる場所をさがしてるんだ。君たち、このあたりに神社

はないかい？」

遍路宿で小耳にはさんだ、野宿するには一イチに神社か大師堂、二に駅のベンチか公園の身障者用トイレ、という情報を、吉岡は実際に体験してみたくなったのだ。四国を歩き始めてから、初めての野宿だった。

「あんよ」

わ〜い、と一斉に声を挙げながら、子ども達は自転車にまたがって走り出した。吉岡も小走りにあとをついて行った。

アスファルトの道を集落の中に折れると、すぐにじやり道にかわって崖に突き当たった。子ども達は、自転車を止めてヘルメットを脱ぎ、かごに入れている。追いついた吉岡が

「君たち、どうしてヘルメットをかぶってるの？」

と聞くと

「これしないと、先生に、自転車とりあげられちゃうんだ」

先の男の子が訳知り顔に言つて、頓着せずに小道を登り始めた。教師はどこでも同じようなことをするもんだな、と吉岡は可笑しくなつて子ども達の後についた。

山崩れ防止用のコンクリート擁壁と剥き出しの地肌の間に、人ひとりが通れるほどのそばみち峯道そばみちが造られていた。前を行く、女の子のスカートに頭を入れかねない急峻な道を、二、三十

メートルも上ったであろうか。

「ほら、ここだよ」

わずかな平地がひらけて小さな社やしろが建っていた。方一丈じょう、踏み台のような階段には両手にのるほどの賽銭箱が置かれ、見上げると淡島神社と書かれた額がかかっている。崖際には箒とちり取りが立てかけてあるので、人の手が入っている様子がうかがえる。吉岡が観音扉に手をかけようとする

「夜、幽霊がでるよ」

吉岡を取り囲むように立った子ども達の中から声があがり、笑いがひろがった。

「おじさん、ゆうれい話が大好きなんだ」

向き直った吉岡は、いつしか教師口調になっていた。

「のつべらぼうとか、ろくろつ首。知ってるかな」

小泉八雲、教科書に載ってたでしょ、と続けようとして小学校二年ではまだ早いな、と吉岡は思い直して扉を開けた。

中には畳二枚ほどの板間がひろがっているだけで、奥にご神体のようなものもなかった。案の定、吹き込んだ落ち葉が二、三枚目につく程度できれいに掃除されている。

「これで寝るところはよし、と。次は、晩ご飯の用意。このあたりに、お弁当、買える

ところはないかな」

子ども達の何人かがうなずいた。

「じゃあ、案内してもらおう」

は〜い

勢いよく山を下りる子ども達の後についていった吉岡は、コンビニ風の酒屋で稲荷と巻きずしがセットになった助六を買い、晩酌用の缶ビールとつまみも買い足した。そして、店内であれこれ商品に手を伸ばしては元にもどしていた子ども達に駄菓子詰め合わせを一袋買うと、店の外に出てから分け与えた。

「もう遅いから、気をつけて帰るんだよ」

は〜い

子ども達は手を振って別れると、次々に自転車を駆って路地に消えていった。吉岡はビニール袋を両手に、山道を一步一步上っていった。

\*

「髪を切られたんですね」

社の前、わずかなスペースに胡座あぐらをかいて吉岡拓真が夕食を饗している。寿司折りのプラスチック容器に置かれた割り箸、栓の抜かれた缶ビールにつまみ、そしてデジカメのディスプレイ画面には、静止画像が明るく映し出されている。花を落とした桜の木の下に置かれた、ベンチがぼつんと。小さな漁師町に、夜のとばりが降りかかる。

「僕には、似合わないでしょ」

「ええ、ちよつと……。髪型ひとつでだいぶ印象は変わりますものね」

「始めから頭を刈って歩いてたら、人の見る目が違ってたかもしれない。たとえば、白衣を着てなくても。そうしたら、別の出会い方があつたかもしれないね」

「それは言っても、詮せんないこと……。髭は、お剃りにならないの？」

「さすがにむさくるしくおぼえてきましたから、明日、宿でそります。これじゃあ、ホームレスと間違えられちゃうでしょう。ところで今日、海岸を歩いてたら、和歌を記した歌碑に出会いました」

「どんな歌？」

「弓なりの海岸線を歩いてたら、車道から浜に出たくなって、小さな駐車場から降りていったんです。そうしたら、高さ二、三メートルの石碑に、歌が刻まれてました。誰が詠んだのかなあ、歌人の名前は読みとれなくて。おそらく郷土出身の歌よみか、山頭火や尾

崎放哉のような放浪歌人がこのあたりで詠んだものでしょう。若山牧水の歌風にも近いものを感じました。

千鳥啼く

引き潮の浜に

足跡残り

交わらねば

交わらぬものを

海岸線は大潮なのか、大きく引いていました」

「ええ」

「僕は誰もいない砂浜を歩きながら、考え続けたんです。いったい、誰の、足跡だろう。交わらねば、といっているのは。自分の足跡と、前を歩いて行ったその人の二つが、振り返れば、平行線をたどっている。時々まじわって交差し、まれには一つに重なっているところもあるかもしれない。ひよつとしたら、作者は過去ではなく、これから歩いて行く先を、未来の道のことを語っているととれる。」

その人というのは、何だかオヤジのようにも思えてきて、僕と父との関係をよんだ歌に感じられたんです。自分に引きつけ過ぎでしょうか？それとも、僕に近い誰かさんとのことかもしれない……。いずれにせよ、『交わらねば／交わらぬものを』という一見あたりまえのことを述べている下の句からは、逆説的に、交わることは良いことなのだ、どんな軌跡を描こうとも、人と人が交わるのは必然なのだという作者のメッセージを、僕は読みとったのですが、間違ってますか？」

「間違いとは、言えないでしょう」

「あるいはまったく視点を変えて、作者は自分の足跡を見ているのかもしれない。砂浜には他の足跡はなくて、自分のものと、波打ち際の関係を詠んでいる、ともとれませんか？そうすると、大きく引いて、いつかはまた寄せてきて足跡を消す波とは、この人生の象徴のようにも思える。世界というか、歴史というか。いずれにせよ、束の間、与えられた生を、たとえ明日には掻き消されようとも、精一杯生きてゆく、そんな喜びというか、静かな決意、覚悟のようなものを感じたんですが、深読みでしょうか？」

「そうとも、とれますよね」

「なぜこう、自分がポジティブに考えられるようになったかといえば、髪を切ったことが大きいんじゃないかと思えるんです。髪の毛といっしょに、自分の中で、何かが落ち

た・・・。オヤジに対する思いというか、親への複雑な感情というか。今まで、ひきずつてきたものを。全部が全部、捨てられた訳じゃないけれど、気持ち切り替えられたように感じるんです。あの人たちも、精一杯生きてきたんだと思うと、少し距離を置いて見れるようになった。感謝とまでは言えませんが、自分の肌にとわりついてたものを、拭いたような気がして」

「それは良かったですね。でも、いまひとつ分かりませんわ。ターニングポイントは、どこにあったんでしょう。いつ?」

「それが、自分でもよく分からないんです。いついつどこどこで、といった劇的なようなものはゼンゼンなくて。ただ足許をみて歩き続けて、考え続けて、いつか峠に出てみたら、見晴らしが良くなった、というような感じですね」

「分かるような気がしますわ。同僚に赤ちゃんが生まれたんですが、赤ん坊って、一日一日、顔つきが違うんですってね。ある時はお父さんの顔に見えて、別の日はおばあさんの顔になってる。赤ん坊はとても成長が早いから、一週間ぶりに見せてもらうと、驚いてしまいますよ」

「うらやましいな。こだわりがなく生きられるなんて」

「お年寄りも大きな赤ん坊ですから、少しずつ何かを捨てて、生まれた状態に戻って向

こう岸に渡るのをみると、いつも感動します」

「僕も死ということ、死者ということ、四国へ来て、ずっと考えているんです。実はこの前は話さなかったけれど、あの本——おじさんの詩集には、裏表紙にこんな言葉が書いてあったんですよ。墨で黒々と、大きく。

死者に導かれて

生を生きる

おじさんが書いたものか、それともおばさんか——多分、おじさんでしょうけど。それを知ってて、おばさんは僕にあの本を、くれたんだらうか・・・。

それはともかく、おじさんにとって、死者とは誰だらうか、死者に導かれるとはどういうことだらうか、って考えたんです」

「ええ」

「お父さんかお母さん——僕には写真でしか見たことのないおじいちゃんやおばあちゃんだらうか。その線は否定できませんが、詩を読む限りでは、僕のような親との葛藤をおじさんが抱えていたとは読みとれません。あるいは、書かなかっただけかもしれませんけ

れどね。おじさんの人となりを知らないので、よく分からない。それよりも詩集で言及されている「彼女」、これがクセ者ですね。この言葉が具体的にある女性をさしているのか、それともアニミズムの自然を女神めがみに喩えているのか、ひよっとしたらおじさんの中の女性的なものを暗喩しているのか、よく分からないんですが、とにかくその女メドが死んで、でもおじさんの心の中では生きています。その手に引かれるように生きて行く——というのが妥当な解釈とも思えたんですが、実際に現地を歩いてみて、別の感想を持ったんです。

おじさんは、いろいろな人に会っているでしょう。たくさんの人という意味ではなく、深い出会いが。それこそ、一期一会といえるような。その出会いを通して、おじさんは巨大な死に、触れたんじゃないだろうか。死者の塊、死者の堆積——ここでは、たくさんの方が行き倒れになってますよね。この、僕が座っている土の下にも、ひよっとしたら骨が埋められてるかもしれない。もう土に還って。

数知れぬ人間が、この道を歩いてきた。創ったのは弘法大師かもしれないけど、それだつて弘法大師というのは固有名詞ではなくて集合名詞かもしれない。僕にはそう思えるんです。名もない無数の人間が、この道を歩いてきた。だから、今、道として続いている。その何ていうかな、上澄みを、自分がかすっているだけに過ぎない。やがて落ち葉のように、朽ち果てていく存在……。後から積み重なり、積み重なり、踏まれてゆく。道というの

は、文化とか、歴史というものかもしれないですね」

「・・・・・・・・」

「退屈ですか？ごめんなさい。でも誰かにしゃべりたくて、しょうがないんです。ここにいると、気持ちが安らいで。東京では、得られないものですよね。日常に戻ったら、またどうなるか分からないけれど・・・・。それに、何だか自分勇敢になったような気がして、野宿も初めてですし、今日、ナマコを生で食べたんですよ！」

「なまこ？あの、ぬるぬるしたきのこですか？」

「いや、あれはなまこで、海のなまこ。和歌をみた後に、海岸を歩いてたら、波打ち際にかけてたんです。何だかぶによぶによしたゴミみたいのが落ちてて、ビニールか何か、何だろうと思って近づいたら、なまこだったんです。鮮やかな桜色の、ふくよかな腹をみせて。荒波に、打ち上げられたんでしょうね。指で押してみると、まだ生きてました」

「それを、食べたんですか？」

「ええ。生きてるから、海に戻してやろうと足で蹴ろうとしたんですが―不意に、これを食べたらおいしんじゃないか、という想いがわいてきて―なまこなんか、職場の忘年会で居酒屋に行った時、小鉢にのってるのを箸でつまんだくらいですが―こんなもん、食べられるんだろうか、とすぐに否定する気持ちになって―腹をこわしたら、どうする。でも、

何だか食べないといけけないような、食<sup>く</sup>べ<sup>て</sup>や<sup>ら</sup>な<sup>い</sup>といけけないような、自分の義務のよう  
な感じがしてきて。成<sup>じょう</sup>仏<sup>ぶつ</sup>するために、とでも言いましょうか。敢<sup>あ</sup>えて理屈<sup>りくつ</sup>をつければ。据  
え膳<sup>ぜん</sup>食<sup>じき</sup>わぬは男<sup>おとこ</sup>の恥<sup>ち</sup>、とでも……。

とにかく、携<sup>た</sup>帯<sup>たい</sup>用<sup>よう</sup>の裁縫<sup>さいほう</sup>セツトの小<sup>こ</sup>さな鉄<sup>てつ</sup>で腹<sup>はら</sup>を切<sup>き</sup>つて、海<sup>うみ</sup>水<sup>みづ</sup>で洗<sup>あら</sup>って食<sup>く</sup>べ<sup>た</sup>ん<sup>で</sup>す<sup>が</sup>—」  
「おいしかった?」

「しよっぱかったですね、かたくて。一口<sup>ひとくち</sup>食<sup>く</sup>い<sup>ち</sup>ぎ<sup>つ</sup>てや<sup>め</sup>て、後<sup>あと</sup>は海<sup>うみ</sup>に放<sup>はな</sup>り投<sup>な</sup>げ<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。  
わたし的には、おいしいのま<sup>ま</sup>ずい<sup>い</sup>の<sup>の</sup>と<sup>う</sup>い<sup>う</sup>よ<sup>り</sup>、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>にそ<sup>そ</sup>ん<sup>な</sup>こ<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>で<sup>で</sup>き<sup>き</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>が、驚<sup>おど</sup>き<sup>で</sup>  
した<sup>た</sup>ね。常<sup>じょう</sup>に安<sup>あん</sup>全<sup>ぜん</sup>。パ<sup>イ</sup>を確<sup>た</sup>保<sup>ほ</sup>し<sup>て</sup>か<sup>ら</sup>で<sup>な</sup>い<sup>い</sup>と何<sup>なに</sup>事<sup>じ</sup>に<sup>も</sup>手<sup>て</sup>を<sup>で</sup>き<sup>な</sup>か<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>オ<sup>レ</sup>に<sup>も</sup>、冒<sup>ぼう</sup>険<sup>けん</sup>  
が<sup>が</sup>で<sup>で</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>ん<sup>だ</sup>な<sup>つ</sup>て。他<sup>ひと</sup>人<sup>と</sup>か<sup>ら</sup>み<sup>み</sup>れ<sup>ば</sup>、一<sup>いっ</sup>笑<sup>せう</sup>に<sup>に</sup>ふ<sup>ふ</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>そ<sup>う</sup>で<sup>す</sup>け<sup>ど</sup>」

「いいえ、そんなことはないわ」

「そうですか。そう言<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>も<sup>ら</sup>え<sup>る</sup>と、う<sup>う</sup>れ<sup>し</sup>い<sup>い</sup>な<sup>あ</sup>。な<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>こ<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>ポ<sup>ポ</sup>チ<sup>チ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>ン<sup>ン</sup>と海<sup>うみ</sup>に落<sup>お</sup>ち<sup>た</sup>た  
その先<sup>ま</sup>の海<sup>うみ</sup>原<sup>はら</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>て<sup>い</sup>たら、子<sup>こ</sup>ど<sup>も</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>飼<sup>か</sup>つ<sup>て</sup>い<sup>た</sup>犬<sup>いぬ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>思<sup>おも</sup>い<sup>い</sup>出<sup>だ</sup>し<sup>た</sup>ん<sup>で</sup>す。急<sup>いそ</sup>に。  
小<sup>こ</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>二<sup>に</sup>、三<sup>さん</sup>年<sup>ねん</sup>の時<sup>とき</sup>だ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>か<sup>な</sup>あ。学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>か<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>帰<sup>か</sup>り<sup>みち</sup>道<sup>みち</sup>に、捨<sup>す</sup>て<sup>て</sup>犬<sup>いぬ</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>つ<sup>け</sup>た<sup>た</sup>ん<sup>で</sup>す<sup>ね</sup>。生<sup>な</sup>  
ま<sup>ま</sup>れ<sup>た</sup>ば<sup>か</sup>り<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>犬<sup>いぬ</sup>で、ま<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>が<sup>が</sup>開<sup>あ</sup>い<sup>て</sup>な<sup>い</sup>。草<sup>くさ</sup>む<sup>ら</sup>ら<sup>で</sup>、ピー<sup>ピー</sup>鳴<sup>な</sup>い<sup>て</sup>た<sup>た</sup>ん<sup>で</sup>す。か<sup>か</sup>わ  
い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>思<sup>おも</sup>つ<sup>て</sup>、懐<sup>なつ</sup>に入<sup>い</sup>れ<sup>て</sup>持<sup>も</sup>ち<sup>か</sup>え<sup>た</sup>ん<sup>で</sup>す。お<sup>お</sup>母<sup>はは</sup>さん<sup>に</sup>怒<sup>いか</sup>れ<sup>る</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>分<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>て</sup>た<sup>た</sup>け<sup>れ</sup>  
ど。家<sup>いへ</sup>に<sup>に</sup>帰<sup>か</sup>つ<sup>た</sup>ら、予<sup>よ</sup>想<sup>そう</sup>外<sup>がい</sup>に<sup>に</sup>母<sup>はは</sup>は<sup>は</sup>何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>ず<sup>ず</sup>に<sup>に</sup>飼<sup>か</sup>つ<sup>て</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。父<sup>ちち</sup>も

日曜大工で、小さな犬小屋を作ってくれました。手先が、器用だったんです。僕は弟が生まれたようで——子犬はオスでした——抱きかかえてミルクをやったり、うちの始末をしたり、かいがいしく世話をしました。獣医のところに行つて狂犬病の予防注射も受けさせて。幸い病気にもかからずすくすくと大きくなつたんですが——僕の方が、興味をなくしてしまつた。あの年頃つて、興味を持つ対象が次々にかわつていくところがあるでしょう。必ずしも僕だけじゃない、と思います。女の子は、どうなんでしょう」

「そうですね、弟も、電車が好きでプラーレルとか親に買つてもらつたり、虫とかもよく飼つてましたよ。長続きしないと云われれば、そうかもしれないですね。女の子は、どうなんでしょう。自分にしか興味がないんじゃないかしら（笑）」

「僕はチビの——犬の名前です——散歩役になつてたんですが、学校から帰つてもスッポかすことが多くなつて、そのことは母によくしかられました。自分で決めたことは守りなさいつて。最後のころは、母がご飯から糞の始末から、何から何まで面倒をみていました。僕は時々、頭をなでてやるくらいで。でもチビがめしをくつてる時にワザとじやまをしてチヨツカイをだしては遊んでたので、段々僕になつかなくなつていました。

1年くらいいたつたころかなあ、春に、死んじゃつたんですよ。オス犬と喧嘩して。夜は鎖から離してたんですが、サカリの季節になつて、遠くまで出かけるようになって。ある

朝、血みどろになって帰ってきたんです。びっこを引いて。母がすぐに獣医にみせにいったんですが、致命傷でした。何でも、ナニナニ菌が血液に入ったからとか言われて。今なら安楽死させるかもしれないませんが、家に引き取って看ることにしました。

最期の日——僕は、立ち会ったんです。たまたま家には僕しかいなくて、チビはどうしてるだろう、と犬小屋を見に行ったら、相変わらず横になって、ゼイゼイいつてる。口をあけて、舌をだらんと垂らして、うらめしげに僕を見上げながら。その日は、ご飯にも手を、口をつけてなかったかな。そうしたら、僕の目の前で、いきなり立ち上がったんです。どこにそんな力が残ってたんだろう。全身の力を振り絞ってよろよろと犬小屋から出ると、ドタンと倒れた。最期でした。

チビの死体は、父親が山に埋めてきました。犬小屋も解体して、ゴミに出して。それからは僕も生き物を飼いたいとは言わなくなっただし、両親もチビのことは話題に出しませんでした。我が家では、一種のタブーになったんです。僕も記憶の底に、封印して……。今から思えば、なまこのように食べてあげればよかったのかもしれない。そうしたら、成仏して。僕が父親になれないのも、何だかチビの崇りたりのように思えてきましたよ。笑うに笑えない、チクシヨウ。涙がでてきた」

「私の弟も、自殺してるんです」

「えっ!? ホントですか」

「ええ、はたちの成人式の後で」

「遺書とかは？」

「何もありませんでした」

「ご両親とかは？」

「交友関係のもつれとか、言っていましたね。私はもうその時は家を出てましたから、詳しいことは聞きませんでした。弟は、弟なりに親との葛藤があったんでしようね。父親が飲んだくれ、母親は夫にもたれかかれないうん息子にベツタリ寄りかかってましたから。私には見向きもしないのに、男だということで弟を自分の生き甲斐にして」

「そうですか……。橘さん、ご両親は今も、ご健在ですか？」

「ええ、生きてるでしょう。二人とも。よく知らないわ。吉岡さんは？」

「僕は、大分前に母をなくしています。末期の子宮ガンで、苦しんで死にました。抗ガン剤治療を受けたのですが、やせ細って頭髮が抜け落ちて。最期は『拓真、こわいよう、こわいよう』と取り乱していました。母が入院したのと前後して、父に痴呆が始めて。母の看病と、父の介護とで、一時はテンテコマイだったんです。でも、不思議と鬱にはなりませんでしたね。なる暇ひまがなかったというか。僕の結婚も控えていて。

正直にいうと、母が生きてる内に結婚式を挙げようと、彼女とのことを急いたきらいがあるんです。もう少しお互い知り合うまで待ってもよかったです。時間との競争で……。病院から車椅子で、母は親戚だけの食事会―それが結婚式だったんです―に、来ました。母への思いは、フクザツですね。もちろん一人息子ですから、生きて欲しかった、治って欲しかった、んですが。安岡章太郎という人の作品に『海辺の光景』という小説があるんですが、ご存じないですか？」

「いいえ」

「そこには、病に臥した母親を、息子が添い寝をする場面が出てくるんです。でも、僕はどうしても母に添い寝ができなかった。手は、握ってやりましたけれどね。刻々と死に向かって行く母の枕許に付き添いながら、夜、死んだように眠る母の顔を美しいと見とれたり、かと思うと、息子を可愛がらなかつたからだよ、いいむくいだ、と毒づいていたりして―」

「お母さんからは、虐待されたの？」

「いいえ、ゼンゼン。彼女なりに、僕に愛情をそそいだと思うんですよ。今から思えば。それがかえって、僕を男としてスポイルする結果になってしまったんです。皮肉なことに。僕はお母さんには、ただ抱きとめてほしかった。叱責されるのは、殴られるのは、父親にして欲しかった。ところが、オヤジがああ腰くだけでしょ。だからやむをえない面が

あつたんです。彼女の生い立ち―幼い時に母親を亡くしてます―や性格―何しろ勝ち気でした―からくるものもあるだろうし、時代的な背景も確かにあつたのでしょう。女性の社会進出という。PTAや町内会の役も、いつも母親が出てましたから。でも母が父の役目を担になつたからといって、僕が救済される訳じゃない」

「それは、そうよね」

「オヤジには、もう望めない。生きる屍しかばねですからね。何も期待できない。遅かつたんです、決定的に。何かを受け継ぐには。そうしたら、僕に何ができるか……。何もできない、というのが今までの僕の結論だつたんです。何も、おまえにはできやしない、と。でも、そうじゃない。最期に力を振り絞って立ち上がったチビのように、自分の生き様さまは、見せることができるんじゃないか、伝えられるんじゃないか。たとえ、ブザマなそれでも――と、思えてきたんです。ここへ来て、このところ。たつた一人、にでもいいじゃないか。チビの死が、僕の脳裏に焼き付いた。あいつは、僕に何かを伝えようとした。世界で、彼の死を記憶しているのは僕だけかもしれない。しれないじゃないかと、僕独りでしょう。でも、僕の心には、やつやつの死しに様さまから、ある大事なものが刻きまれた。それが三十年の時を経て、今、ようやく咀嚼そしやくができて、あなたに話している。

それでいいんだと、思えてきたんですね。僕にとって死者に導かれるとは、そういうこ

とかな、と」

「長いお話でしたね」

「最後にひとつだけ、橘さんのことをお聞きしてもいいですか」

「ええ、どうぞ」

「お父さんにイタズラされたって、具体的に、どんなことをされたんでしょう」

「馬鹿ね。そんなことは、他人ひとに聞くもんじゃないでしょ」

「そうですね・・・」

ぼおっつ、と汽笛の音がして、一隻、遅れた漁船が灯りをともして港に帰ってきた。その瞬間、デジタル画像が電池切れのためか、消えた。吉岡の黒くまるまった背の向こう、はるか彼方の水平線で、夕映えが最後の残光をはなっていた。



八 同行二人

## 朝方――

吉岡が目を覚ますと、時計は8時を回っていた。久しぶりに飲んだ酒のせいか、頭が少し痛い。四月下旬とはいえ、板間の上にビニール袋に足を突っこんだ状態で寝たので、体が冷え切っていた。観音扉を開けると、明るい外気が流れこんできた。とうに漁に出ているのだろう、港には一隻も漁船の姿がなかった。

吉岡は荷物を片付けると、備え付けの箒で堂内を掃き、一礼して山を下りていった。

子ども達は学校に行き、勤め人は職場に赴いた後の、朝食の片づけが済むかすまないかの一刻……午前の仕事にとりかかる前の、ほっと一息つく時間。通りには、誰もいない。昨日ビールを買った酒屋はまだシャッターが閉まっていたので、吉岡は自販機の脇にゴミ袋を置くと、温かいコーヒーでも飲もうと思つて財布を取りだした。が、あいにく小銭は切れていた。吉岡は思い直したように踵かかとを返し、港の方に歩いていった。

海に突き出た小さな突堤が、大人の高さほどの防波堤になっていた。吉岡は船溜まりの脇を進んで護岸壁のところまで行き、手をかけて海を美晴るかそうとした。その時

「見えるじゃろが」

野太い声がかかった。

「え!？」

吉岡が脇を向くと、老婆がこちらを見ていた。白髪まじりの髪を後ろで無造作にとめ、粗末な着物を着ている。赤茶けた顔には、深いしわが刻まれていた。全体が黒っぽい印象だったので、今まで巖いわおかなにかのように見間違えていたのだ。吉岡に目を据えたまま、老婆は続けた。

「ほら、咲いてるやろ」

老婆に促されるように、吉岡は振り向いた。

緑の山の斜面にぽっかりと小窓が開き、昨晚泊まった淡島神社のお堂が見とれた。その周囲の木々の枝に、紫の花が、葡萄の房のように垂れていた。

「藤の花ですか？」

吉岡が振り返って尋ねると、老婆はにこりともせず答えた。

「桐の花や」

老婆に射すくめられたようで、吉岡は圧迫感を覚え、逃れるようにまた山に向かった。言われてみれば、確かに藤のようにつるではなく、一本の大きな木からいくつもの花房が垂れ下がっているのが見えた。

「下駄にする、あれですよね」

老婆は吉岡の言葉には頓着せず、背後から続けた。

「お遍路さんの花いうて、こどものころから、春の盛りに、花をつけよる」

吉岡が生徒のようにうなずいて振り向くと、顔の前に握り拳が突き出されていた。吉岡の怪訝な表情をみてとったか、老婆は厳しい顔つきのまま「それ」と顎をしゃくった。吉岡がおそろのおそろ手を差し出すと、硬貨が掌に落ちた。百円玉が三つ、入っていた。ずっと握りしめられていたのか、ぬくもりがあった。吉岡が四国に来て初めて受けるお接待だった。吉岡は米つきバツタよろしく何度も頭を下げると、老婆の許もとを辞した。硬貨を握りしめたまま、いつしか、小走りになっていた。

\*

## 昼方――

人家の点在する山あいの国道を、吉岡が歩いていた。昨夜の港町から、遍路道は大きく弧を描いて海岸線に沿って続くのだが、吉岡は次の札所のある地方都市まで直線で結ぶ山越えのルートを選んでいった。そこは一日で着ける距離ではなく、どこかで一泊する必要があった。今度は海の傍はたではなく、山の中で野宿を試みたい気持ちに吉岡はなっていた。

二十万分の一の地図で見ると、ちょうど中程のところ「文」の記号が記されている。小学校か中学か、いずれにせよグラウンドの用具置き場か校舎の片隅にでも、雨露をしのげる場所くらいあるだろう、と吉岡は予測を立てて歩き始めた。

昼時になつていた。前方の道路際に、○○パンと白く染め抜かれた赤い幟が風に揺れている。吉岡は昼食の調達がてら、店の人に道を聞いてみることにした。

食料品や雑貨が所狭しと並べられた、「田舎の万屋」だった。吉岡が弁当にしようかパンにするか、迷つて店内を物色していると、レジの方から気弱そうな近所のおばあさんと中年の女主人のやりとりが聞こえてきた。

「これ、賞味期限がきのうまでやけど、だいじよぶかねえ」

「おばさん、心配せんというて。うちの食パンは、一週間でも二週間でも、持ちますよ」  
都会なら廃棄処分にするものを、ここでは堂々と定価で売っているのか。それも保存料で腐らないことをPRして——と思うと、吉岡は笑いがこみあげてくるようだった。下の方から幕の内弁当を引き出すと、吉岡はレジに向かった。

「すみません。この先に、小学校はありますか」

カウンターの二人は一斉に振り向き、口をつぐんだ。一目でよそ者とわかる吉岡に対して、女主人は冷たくはないがよそよそしい態度で接した。

「去年、廃校になりましたが」

それだけ言うと、事務的に袋に包み、レジを打った。吉岡は「どうも」と釣り銭を受け取りながら言って、店を出た。

目論見もくろみはずれたが、不思議と不安感はなかった。学校の機能はなくなっても、よもや建物まで取り壊すことはあるまい。まして地図には、集落を表す記号が描かれているのだ。そこまで行けば――人が暮らしている限り――何とかなるだろう……。

国道の改修工事で、カーブを描いた旧道が新道から切り離されて小公園になっているところがあつた。吉岡は、お腹もすいてきたのでお昼にすることにした。公園といつても、アスファルトの上にコンクリートのベンチと木の鉢植えが置かれただけの殺風景な場所である。植え込み越しに、時折、スピードをあげて走り去る車の影が透かし見えた。

「桐の花のお接待」

弁当を膝の上に置き、プラスチックのふたを開けながら、吉岡はつぶやいた。学生時代に下宿して以来の一人の生活で、何気なく独り言をいうようになっていた。手を合わせてから幕の内を食べ始めた吉岡は、箸を片手に口をもぐもぐさせながら足元を見た。四国遍路のために新調したスニーカーが、雨と土埃つちぼこりで汚れていた。

実は太龍寺から室戸岬に向かう道中で、吉岡は一度車に乗っていかないかと誘われてい

た。左手に海岸線を見ながら続く長い道を、考え事をしながら歩いていた吉岡の脇に、後ろから来た軽トラックが停まったのだ。

「岬まで行くんなら、乗ってかんか」

農家の人や漁師さんがよく被る野球帽をかぶり作業着を着た初老の男が、右手は開け放した窓枠に肘を載せ、左手はハンドルにもたせたまま、ぶっきらぼうに言った。

「いえ、結構です。僕は、歩いて行きますから」

“四国を歩き通す”一念に燃えていた吉岡は即座に断ったが、男はイヤな顔もみせず車は走り去った。お接待を何か特別なハレの行事のように思い込んでいた吉岡には、拍子抜けするほど日常的すぎて、受け入れられなかったのだ。理解できない体験を、無意識はすでに忘却の淵に追いやろうとしていた……。

吉岡は恥ずかしくなったが、あの時——もし乗っていたら、どうなっていただろう、という疑問が湧いてきた。橘かおるや中村狂女に会うこともなかったに違いない。すると、お接待を断ったという選択が、自己省察を深めるといふ点では、正しかったということになる。受ければ受けたでまた別の出会いがあったかもしれないが、それが結果として正しいか否かなど、誰が保証できよう。

いや——筍の佃煮を箸でつつきながら、吉岡は独りごちた——それを言うなら、そもそもこ

うやって四国をお遍路しているのは、×男を殴って謹慎処分を受けたことから来ているのだ。それが過ちなのは、自分も認める。すると、人間は過たなければ、自分に向き合おうとしない存在なのだろうか。あの日も、いつものようにつつがなく授業を終えて、つつがなく陽子の待つ家に帰って、つつがなく遅い夕食を一緒にとって、あたりさわりのない会話で一日を終えることもできたのだ。お互い、胸中の深淵に、フタをして。それが×男の感情に輪をかけた自分の暴力的な感情で、破られた。それで良かったのだろうか？ いや、良しとしたなら、自分の行為は、選択は、正当化される。本当にそんなことが、許されるのだろうか。何が何だか、分かんなくなってきたぞ。ごちそうさま。

腹八分目になった吉岡は、弁当を脇において足を組み替えた。ふと足許に目をやると、日に干されたミミズが、弱々しくのたうちながらよってたかってかみついている蟻たちに、運ばれている。吉岡は逆さ箸にすると、みみずをつまんで茂みの方に放り投げた。

\*

夕方――

鴉が鳴いていた。二羽、三羽と、山の峰から峰へと渡って行く。夕闇が迫っていた。吉

岡は焦る気持ちで足がもつれるように国道を歩いてきた。どこかで見落とししたのか、それとも枝道に入ったところにあつたのか、学校の校舎らしきものは建っていないかつた。まばらにあつた人家もいつしかなくなり、田畑も消え、左右から迫る植林された山と荒野だけの光景になつていた。さすがに「野宿」は、こわかつた。どこか人の温もりのする――作業小屋でも何でもいい、たとえ寝れなくても横になれる場所が欲しかつた。

時折、ヘッドライトの光を山の斜面に投射して、車が走り過ぎていつた。吉岡はヒツチハイクの案を講じたが、対向車に手を挙げるだけの勇氣はなく、背後からモーター音が聞こえてくる度に「お接待、お接待」と背中で念じていたが、停まつてくれる車はなかつた。

とうとう空は瑠璃色に変わり星が見え、手許が覚束なくなる暗さになつた。車の通行も、絶えた。夜通しこのまま歩き続けるのか、それとも・・・と吉岡が暗澹たる気持ちに襲われた時、前方左手に薄明かりが見えた。わずかな平地の杉木立に囲まれて、どうやらお堂が建っているようだつた。産土神の神社であろうか。手洗い所も社務所もなく、ただ古びた小さなお社が坐し、神前の鈴が下がっているべきところに裸電球がポツンと灯つていた。泉鏡花の幻想小説にも出てきそうな、舞台設定だつた。

「はい、泊まるのか」

吉岡はつぶやいて、ため息をついた。昨夜の淡島神社は海に開かれていたためか恐怖感

は全くなかったが、ここはもののけ漂う闇底やみそこに沈む、えも言えぬ怖さがあつた。と同時に、矛盾するようだが、静謐せいひつな感じも吉岡は受けていたのだ。

「これも運命さだめと思いい切り」

自らを奮い立たせるように歌舞伎役者めいた口調で、えいやっ！とばかりに吉岡が雑草に覆われたじやり道の参道に足を踏み出そうとした時

「どつぞ」

と背後から声がかかった。吉岡が振り返ると（いつの間に来ていたのか）白い乗用車の運転席から男が身を乗り出すように助手席のドアを開けていた――。

\*

男は町役場の商工課に勤める四十年輩の公務員で、勤め帰りだと自己紹介した。助手席で狐につままれたような顔をして座っている吉岡も、簡単に自己紹介をした。吉岡が向かうとしていた次の札所が、幸いにも男の家の近くだというので、車で送ってもらえることになった。

「四国は、産業がないでしょう。僕らの同級生も、東京や関西に働きに出してしまうし。

四万十川の清流や坊ちゃん道の道後温泉に代表される、自然や人情が、大事な観光資源なんですよ」

カーブが続く山間の道を、男は慣れたものでスピードも落とさずに運転しながら、口の方もなめらかだった。

「お遍路さんも、売りの一つでしてね。最近はテレビや雑誌でとりあげられるようになって、お客さんが増えたはいいんですが」

男はちらつと、横目で見た。

「中には不心得者もいます。実は最近、あそこでレイプ事件があったんですよ。東京では、報じられなかったでしょうけど。歩き遍路の男が、道々知り合った女の人にイタズラを働かましてね」

裸電球の吊された仄暗いお堂の中、狐のお面をかぶり緋色の着物を着た若い女の腰紐がほどけ、白い襦袢がはらはらとめくれる場面を、吉岡は想像してゴクリと唾を飲みこんだ。

「ここから下りです」

男の言葉と同時に、黒い樹海が開け、眼下に遠く、街の明かりがほのめいていた――。

\*

「ごめんください」

車で送ってもらった札所は、コンクリート造りの宿坊を備えた、立派な寺だった。団体さんが泊まっているのであろう、窓からは明かりとにぎやかなざわめきがもれてくる。吉岡は、履き物で埋めつくされたような寺務所の玄関に立って、思い切つて声をかけた。

「おっ」

しばらくして現れたのは、見るからに寺の小坊主らしい、袖口をしばった黒の作務衣にまるぶち眼鏡をかけた若い男だった。

「少々お待ち下さい」

男がとりついで次に現れたのは、着物姿の風格のある、年輩の女性だった。住職の奥さんの、大黒さんだいしやくと思われた。

「今晚、泊めてほしいんですが」

時間は七時を回っている。それにこの団体客、予約もなしにダメかな、と思いつながら吉岡がおずおずと切り出すと、女はそれこそ吉岡の頭のとっぺんから足の爪先つまさきまで、品定めするように目を移して見た。

「良ろしいでしょう。どうぞぞ」

吉岡の意に反し、案内されたのは別棟の宿坊ではなく、玄関の奥の来客用と思われる畳部屋だった。先導した小坊主がいったん下がり、お盆にお茶と赤飯、折り詰めの寿司をのせて持ってきた。

「明朝は、ご挨拶は不用とのことですよ。そのままお発ち下さい」

丁寧な畳に手をつけて、若い男はそれだけ言うのと引き下がった。その時になって初めて、吉岡は自分がお接待されていることに気づいた。不思議な体験の醸し出す余韻と、少々の居心地の悪さに包まれて、吉岡は出された夕食を食べ、四国に来て初めて羽毛布団の中で寝た。

\*

翌日――

吉岡は、路線バスに揺られていた。朝方の通勤通学客の流れもとどえ、車内には吉岡をふくめて二、三人の頭しかみえない。病院通いか、町のデパートに買い物にでも行くのであろうか。お国訛の女性の声が停留所をアナウンスするのだが、バスは素通りするだけで乗降客はまったくなかった。

車窓には、リアス式ののどかな海岸線が続いている。沖の島の影にまた島が見え、懐に抱かれたような小さな集落が、ほの見えた。あそこでも、今日一日の暮らしが、ゆつたりと動いているのだろう……。吉岡はこのあたりがどこか地図で調べようとして、リュックをかきまわしながらデジタルカメラが手に当たった。昨日今日と、写真を撮っていないことに気づいた。窓の外にカメラを向けて―なぜか手がぶれる。車体の振動か、それとも腕が震えているのか。焦点が定まらず、流れるように画面の乱れたピンボケ画像を、吉岡はこれでもいいや、と記録に残し、カメラをしまった。

いつしか伊予の国、愛媛県に入っていた。菩提の地と言われているところである。今朝起きた時吉岡は、「悟り」とはほど遠いが、一つのこだわりを捨てていた。それは、次の札所まで、バスに乗ってみようと思いついたのである。長い夜をうつらうつらしながら、何だか自分がお大師さんに雲の上から―ピノキオ人形のように―見えない糸で操られている。それならば何を履こうか―下駄であれスニーカーであれ―何で移動しようか―二本の足を使うか、自転車やバイク、タクシーやバス、電車で回ろうか―会うべき所で会うべき人に出会わされる、そんな気がしてきたのだ。大切なのは、「四国を歩き通した」と自慢げに話すことではなく、日々の体験から学んだことをそれまでの人生経験と照らし合わせて反芻<sup>はんすう</sup>し、今後の糧に生かせるかどうか、だろう……。

都会と地方を結ぶ高速バスではなく、地方都市と都市を結ぶ路線便を乗り継ぎ乗り継ぎして、吉岡は次の巡礼地に向かっていた。昼時になっていた。遅れて鉄道が敷かれた地方ではよくあることだが、JR駅から離れた町の中心街にあるバスターミナルが終点だった。吉岡は、一目見て「交通弱者」だと分かる年寄りたちの後に続いて、タラップを降りた。

商店街は活気がなく、見るからに衰退していた。間のびした案内放送が流れる、人通りのほとんどないアーケードを抜けると、広い通りにでた。どうやら駅前のロータリーと結ぶ道のようなだった。通りに面して、大きな割烹店が目に入った。昼の定食を頼むには値段も格式も高いが、慶弔の場として利用すれば一種のステータスとして認知される、そんな店構えだった。吉岡は、きのう一日のできごとを自分で祝いたくなって、そこで昼食をとることにした。

店の前の駐車場を横切っていた時、ドアが開いて一人の女が出てきた。橘かおるだった。

「橘さん」

吉岡が嬉しそうに声をかけると、かおるが顔を上げてこちらを見た。

「吉岡拓真です」

ええ、分かっていますよ、というふうに愁いを帯びた顔でかおるは頷いた。

「ご無沙汰です。その後、どうしてました？」

自分のことを覚えていてくれたのでなお嬉しく、吉岡の声はうわずっていた。

「髪を、お切りになったんですね」

吉岡の問いには直接答えず、かおるが小さな声で聞いた。吉岡は、無意識に手が動いて頭をかく仕種をした。

「僕には、似合わないでしょう」

「いいえ、お似合いよ」

その時、二人が立ち話をしている駐車場に、反対車線から黒塗りのハイヤーがブレーキ音をきしませて入ってきた。ドアが開き、医者か中小企業の社長か、見るからに恰幅のいい中年夫婦が、車から降りた。玄関に向かう着飾った後ろ姿を横目に、吉岡は橘かおるに尋ねた。

「今日は、これから、どちらまで？」

「今日はもう宿をとってあるので、このあたりをゆっくり散策してみようと思っています」  
かおるが振り向いた先には、大通りに面して△△旅館という看板が見えた。

「そうですか。それなら、僕もご一緒させてもらおうかな。積もる話もありますから」

吉岡が一人合点をして、エスコートするようにかおるの肩に触れようとした瞬間、かおるは哀しげな表情で身を翻し、停まっていたハイヤーの、まだ閉まっていなかった後部座

席に上半身をすべり込ませた。吉岡が、何か道でも聞くのかなと思っていると、ドアが閉まり、ハイヤーは発車してしまった。吉岡の目には、無表情に前をみつめるかおるの横顔が見え、耳には、バッグに下がっていた鈴の音が、木霊こだましていた。

車は、大通りの交差点のところで黄信号を無視して左折した。街の位置関係から判断して、次の札所の方向だった。吉岡は、またとりのこされた。

しばらく駐車場に立ちつくしていた吉岡は、とぼとぼと駅の方に向かって歩き始めた。うなだれたまま旅館の看板の下を通り過ぎ、交差点まで来た。一度、二度、三度……と、信号が変わった。見上げると、明るい空に月が出ている。不意に、吉岡はリュックを肩からはずすとしゃがみこんだ。「二期一会」の紙をはがして丁寧に畳み、リュックにしまうと、中からデジタルカメラを取り出した。そして、メモリーカードを抜き出すと、盲人用ボタンの上にそっと置いた。吉岡は立ち上がって、リュックをしょいなおした。

さあ、これからは、読者の想像に任せるとしよう。直進すれば駅、レールは東京に繋がっている。左折は次へ、右折はもときた札所の方角である。信号は、もうすぐ変わるだろう。吉岡が歩み始める前に、我々もそろそろ彼から離れようではないか。吉岡の父の、指先の紙飛行機に乗って、我々は、舞い上がる。吉岡の姿が小さくなり、町並みが遠ざかり、代わって四国の山脈やまなみが眼下に見える。機体が、おおきく揺れる。海が、鏡のように輝いてい

る。太平洋からは、今日も波が寄せている。

# 終章

もてなすことと、もてなされること。

私はテーブルに置いた両手を、見る。普段は意識しない肉体が、存在そのもので私に迫る。私は右手を上げ、左手の甲に重ねる。包み込むように、私は触れる。しばらく感觸を感じた後、私は手を置き替える。左手を上、右手を下に——同じことを、繰り返す。すると別の感觸が、感じられる。私はわたしに触れる……。

もてなすことともてなされることは、本来はひとつなのだろう。  
私は開かれたままの卓上のノートに目を移す。

「私も一緒に旅へ出よう、物語という旅へ」

左のページの一行には二重線が引いてあり、右のページには次の二行。

「物語を創ること、それもまた自分を越える旅である。

人生とは言うまでもなく、一人一人が自分の物語を紡ぐ創作である」

私はノートを閉じ、ブリーフバックにしまう。窓外そうがいに目をやって、立ち上がる。レジで代金を払い——いつものようにマスターの「ありがとうございます」という一言を添えたレシートを受け取り——まなざしを背に感じながら、ドアに向かう。ガラス戸の向こうの世界は、私が扉を押し開く一瞬で音と色彩が与えられ、私の身体は雑踏にすべりこむ。